
あ、どうも、拾われました。

337

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あ、どうも、拾われました。

【Nコード】

N5983W

【作者名】

337

【あらすじ】

とある場所で拾われた創真、拾ってしまった真希。

そして、色々と紆余曲折があつて、仲良く生活していきます。

その、生活に邪魔が入って困る。

かなり簡単にまとめるとこんな感じですよ

バトルあり、超能力ありの物語です。

真面目な感じにあらすじを書くよ、

この世界と同じ時間軸の中にあるが平行して存在する隣の世界、
並立世界。この世界では科学技術が進歩しているのもちろん、能力

パラレルワールド

の呼ばれる特殊な力を持った人が多く暮らしている。その世界の中で出会った創真と真希、この二人を巻き込んで物語が進んでゆく。こんなかんじです。まあ気軽に読んでいって下さい

ブローグ

ブローグ

「お姉えーもう朝だよー起きてー」

とある晴れた日の朝、どこかの民家から元気な声が聞こえた。

「ほら、早く起きてよ。今日学校でしょ？早くしないと遅刻するよ。ほら起きたー」

勢いよく被っていた毛布が奪われた。

「もぉー起きてーって今日、祝日じゃなかったっけ」
頭を掻きながら眠気眼で体を起こす。

「祝日なのは来週だよ。はい、起きた起きたー」

「えっ、そうだったけ？」

そう言いながらカレンダーを確かめてみる。

「あぁーホントだ。んーじゃあしょうがないし、起きるかぁ」

立ち上がって軽く伸びをした。

「もうそろそろで、ご飯出来るから、早く来てね」

と言い切ってから、なぜか少しにやけながら部屋を出ていった。

まったく、元気な妹がいると大変だ。と思いつながら制服に着替え始める。そしておもむろに時計へと目をやる。

「もぉこんな時間なの！このままじゃ遅刻する！まったく、どうせ起こしてくれるならもっと早く起こしてくれればいいものを、なんでこんなギリギリの時間に起こすのよー」

理不尽な悪態をつきながら急いで支度をする。

学校の登校時間は8時40分まで、それ以降は遅刻扱いとなる。

まだ、一年次の最初の時期であることや、遅刻するとなにかと面倒くさい指導があるので遅刻はしたくない。現在時刻8時17分。残りの支度を急いでもあと7〜8分はかかりそうだ。そして、自宅か

ら学校までは走っても15分はかかる。正直言ってかなりギリギリである。

勢いよく部屋を飛び出し階段を駆け下り、顔を洗ったりなどを早々と済ませ食卓へと入り、そして、いきなり。

「起こすなら早くおこしてよお」

少しにやけながら妹が返事を返す。

「起こしてあげたんだから感謝してよね」

「はいはい、ありがと。んじゃ、行ってくる」

そう言いながらテーブルの上にはパンと目玉焼きが置いてあったが、パンだけを持って食卓を出ようとすると、いきなり「待って！」と、声をかけられた。

「何？」

「お姉え、まさかそれくわえて学校行くの？」

「んまあそうだけど。何か問題あるかな」

「そんな問題って程のことじゃないけどさあ・・・」

言い難そうに、少し語尾を弱く返し、そして。

「いまだき、パンをくわえて急いで登校ってどうかなあ。昔の少女マンガじゃないんだし、曲がり角でごっつんこって、そんなラブコメ的展開は無いと思うよお？」

妹がにやけながら茶化して言ってきた。

「そんなの狙ってないし！ てかもう時間無いから行ってくるね。」

妹の発言を受け流し玄関へ向かい、靴を履き、勢いよく扉を開ける。

「いってきまーす」

そして家の中から声が返ってくる

「いってらっしやーい」

学校へと走って向かいながら考える。

あの子、さっきの言葉を言いたいがためにギリギリに起こしたのかしら。だからさっきにやけてたのか。だったら帰ってから少し怒ってやらないと。

住宅街の中を走り続け、家と学校との丁度間くらい場所にある大きい公園が見えてきた。公園の中に入り、走り中央付近に差し掛かった時に何処からか声がかけられた。

「君、ちよつと待って」

声の主がどこにいるのかわからず、立ち止まり辺りを見回して見ると、同じ年位の男がベンチで力尽きたように倒れていた。

「な、何か」

恐る恐る返事を返してみた。そして、返事が返ってきた。

「そのパンくれませんか？」

第1 - 1章

第1章 出会い・・・

ピー、ピー、ピー

どこか遠くから音が聞こえてくる。次第に音が近づいてくるように聞こえる。これは、心拍計の音だろうか？ なんでこんな音が聞こえてくるのだろうか？ それに、体が重くてあまり動かないし。地面が軟らかい。

どうやらどこかに寝かされているようだ。

重たい瞼を開いてみると、そこには天井があつた。辺りを見回して見ると、病院？ のような場所だった。

そして、そこには同じ年くらいの一人の女性が本を読んでいた。窓からの柔らかな陽光が降り注ぎ、大人びた雰囲気をかもし出している彼女をより素敵に映し出していた。

「こ、ここは？」

どうにか声を絞り出してみた。

「あ、目が覚めた？ はあーよかつたあ」

安堵するかのように彼女が胸を撫で下ろしていた。

しかし、彼女は誰なのだろうか？ 会ったことがあるような気がするが、思い出せない。思い出そうとすると頭が痛み思考を妨げる。「君は、誰？」

「あー覚えてないんだ。まあ、しょうがないか。アンタ、私と話してた時も意識が半分くらいしかないように見えたし、その後すぐ倒れちゃったし。まったく、大変だったんだからね」

なぜだか親しげに話しかけてくる

「何があつたか聞きたい？」

このまま何があつたのか解らないままと言うのは嫌なので聞いて

みることにした。

そして、彼女が語った。それがこれだ。

一日前

場所は御友高校前公園、この辺りでは一番大きな公園だが、朝の時間はほとんど人通りの無い場所。

遅刻ギリギリで急いでいた真希はパンをくわえたまま、公園を駆け抜けようとしたが、突然「君、ちよつと待って」と声を掛けられた。辺りを見回すと、ベンチに倒れこむように力なく横たわっている男がいた。

「な、何か」

嫌な予感を感じつつも返事をした。

そして、こう返ってきた。

「そのパンくれませんか？」

「？ はい？」

予想外の言葉に絶句して固まる。

「お願いです。そのパン下さい」

頭だけを動かし、脱力した声をだす。

「え、いや、なんで？」

怯えながら、戸惑いながら答える。

「色々と事情があつて四日間程ほとんど何も食べてないんです」

生気のない声で返す。

見ている限りでは本当に何も食べていないようだし、何というか、全身から？負？のオーラのようなものが漂っている。

仕方がないので、嫌だが、パンをあげることにした。

「は、はい、どうぞ」

「どうも、ありがとうございます。」

彼が私からパンを受け取り、そして、すぐさまパンを食べきった。

(あ、そういえばこんなことをしている場合ではないじゃないんだ
った！ 急がないと遅刻する！)

「んじゃあ、私は急いでいるから、じゃあね」

去ろうとしたが、また「まって」と声を掛けるなり、おもむろに
立った。

今まで寝転んでいたせいでよくわからなかったが、身長が170
cm以上はあるようだが、今は力がないせいか、少し猫背気味にな
っている。

「な、何？」

(早く学校行かなきゃ行けないんだからはやくしてよ！)

「パンをくれて、本当にありが」

頭を下げ律儀に礼をするのかと思いきや、下げた頭は停止するこ
となく、そのまま倒れた。

「え、あ、ちよ、アンタ、どうしたの！」

急いで駆け寄り、声を掛けながら体を揺すってみたが、反応がな
い。どうやら気を失っているようだ。

「え、ちよっと、どうしよう。とりあえず119番？ あ、でも、

なんかワケありみたいだし、どうしよう」

そう思いながら、少し考えた。

「仕方ない、とりあえず研究所^{ラボ}に連れてくかあ」

これが昨日あったことだそうだ。

正直こんなことをしたのか、と話を聞きながら驚いていた。

「それじゃあ、君が俺をここまで運んでくれたの？」

「そうよ、大変だったんだから。それに、アンタのおかげ学校は遅
刻。まったく、いい迷惑だったわ」

(俺のせいで遅刻させてしまったのか。悪いことをしてしまったな)
そう思いつつも、一つの疑問を呈してみた。

「それにしても、どうやってここまで運んでくれたの？」

どう見ても彼女の体格は普通の女子高生と同じで、男を一人で担ぐには無理がありそうに見えたからだ。

「ああ、それは簡単、私、風使い（エアロプレイヤー）だから、その能力で運んだの」

「へえ、そうだったんだ」

どつりで、俺を運ぶことが出来たわけだ。

風使い　風を扱うことが出来る能力者の総称。

そう、ここは、このような能力者が普通にいる世界　パラレルワールド 並立空間。

ここ、並立空間は日本のどこから行くことが可能な日本独自の空間である。

この空間を知るものは並立空間の外では、極一部の者しかおらず、日本独自の空間のようだ。

なぜ並立空間の中に能力者が沢山居るかと、並立空間の外の世界で能力が使える者、使う素質のある者が、この世界に集められているからだ。

そして、この世界では能力の開発がされている。

この開発によって沢山の者が能力を扱うことが可能になった。

能力者は扱うことが可能な力によって0〜10のレベルにランク分けされる。

「風使いにしてもよく運べたよなあ」

素直に感心していた。

「え、何で？」

「確か風使いの能力で人を運ぶのってそれなりのレベルがなくちゃ出来ないだろ。それに」

自分の体の怪我を確かめながら言う。

「ぜんぜん切り傷とかも出来てないみたいだし。風使いの能力で力任せに運んだら、風で軽く肌が切れたりするのにそれが無い。君す

「ごいね」

「んまあ、レベル9だからね」

誇らしげに、自慢げに答えた。

「へえ、すごいね」

素直に驚いた。

突然思い出したように彼女が訊く。

「そういえば、アンタ、なんて名前なの？ 私は、彩吹真希

よ

「俺は、桜の空って書いて、桜空 創真って言います。」

「へえ、桜空ってなんか綺麗な苗字ね」

「俺もそう思うよ」

お互いにこやかに話す。

「じゃあよろしくね、創真」

「こちらこそ、彩吹さん」

と、いきなり真希が睨んできた。

「創真！」

「はい！」

反射的に返事をしていた。

「私たちはもう友達なんだから、下の名前で呼びなさい！ それに

？さん？を付けるのも禁止！ わかった？」

「は、はい…真希」

正直言つて女子の下の名前を呼び捨てで呼ぶのは、呼びにくい。

「よろしい」

にこやかに、笑顔になる。

「それに」

続けてなにか言い出した。

「その少しよそよそしい話し方やめなさい。私たちはもう友達なの、

だからその話し方はなし！ いいね、わかった？」

「いや、でも、俺は助けてもら」

「人が倒れていたら助ける。私は、そんな当たり前のことをしただ

け、だから、気にしなくていいのよ」

真希が俺の話を遮った。

「だから、よそよそしい話し方はなし、いいね？」

真希は俺の顔を覗き込んできた。

「わかったよ」

根負けして答える

「わかったならよろしい」

笑顔でいった。

まだ真希と会って少ししか経っていないがわかったことがある。

それは、明るくてだいが強引な性格をしているということだ。もう

一つは、真希が綺麗だということだ。

(こんな綺麗な人と同じ空間に一緒に居れるということは、正直言

って嬉しい。こんないいことがあるなら倒れるのも別に悪くないな)

こんなことを思っていたところに真希が声を掛けた。

「そついえば創真はあんなところに居たわけ？」

俺は無意識のうちに俯いていたみたいだった。

「あ、別に答えたくなかったら言わなくていいから」

訊いてはいけないことを尋ねてしまったのかと真希は焦った。

少し間を置いてから創真が口を開く。

「とある施設から逃げ出してきたんだ」

「それってどんなところ？」

「それはちよつと・・・」

「そつ・・・じゃあこれでこの話はおしまい！ それじゃあ、私は

恵理奈さんと呼んでくるね」

言い切るなり立ち上がった。

「恵理奈さんって誰？」

「ん、ああ、そついえばまだ言っていなかったわね。恵理奈さんはこの研究所の所長さんよ。創真のことを治療してくれたのも恵理奈さんよ。」

そつ言い残して部屋を出て行った。

(ここは研究所だったのか、それにしても医療設備は整って
いいな)
辺りを見回して見ると、一見病院と思える程の設備が整っていた。
しばらく部屋の中を見回していたら真希が誰かを連れて戻ってき
た。

「この人が恵理奈さんよ」

そこには白衣を着た身長150cm半ばの女性がいた。

「目覚めたみたいだな。具合はどうだ」

やや中性的ではあるが女性らしい声だった。

「おかけ様でもう大丈夫そうです」

「どうやらそうみたいだな。診察するから服をめくれ」

「あ、はい」

胸に聴診器が当てられた。

「これなら、明日にでも全快してるだろう」

体に付いていた医療機器が外された。

「そうですか、ありがとうございます」

「良かったじゃん、たいしたことなくて」

「ああ、そうだな」

安心したことによって少し力が抜けたように答える。

「もう大丈夫そうだから私は戻らせてもらうぞ」

そう言っただけで部屋を出ようと途中で思い出したかのように言葉を残
す。

「どうせ明日までは外には出させんから、この中でも案内してやっ
てくれ真希」

少し驚いたように答える。

「え、中見せちゃっていいんですか？」

「こいつだったら別にかまわん」

恵理奈さんが俺のことを見ながら言う。

「私は人を見ることに関しては自身があつてね、お前がここの情報を
外に漏らしたりしないやつだということとはわかる」

どうやらある程度信用されているようだった。

「それじゃあな」

白衣を翻し部屋を出て行った。

「それじゃあ、恵理奈さんの許可も出たことだし、中見て回るって言っても、実際見られて困るようなものはないんだけどね？」

「そうか、することも他になさそうだし、そうするよ」

「そう言いながら体を起こす。」

「そういえばもう動けるの？」

「ああ、大丈夫そうだ。目が覚めてからだだいぶ経つしな」
微笑みながら答える。

そして、ベッドから立ち上がる。が。

「おっと」

ふらついて倒れそうになった。

「あぶない！」

倒れかけた創真の体を真希が支える。

「ありがとう」

空笑いになりながらも礼をする。

そんな創真に呆れと心配の含まれた声が返ってくる。

「創真、まだ動くの辛いなら別に無理しなくていいんだからね」

「いや、別に無理はしてないよ。ただいきなり立ったから、少し立ちくらみしたただけだから。心配しなくていいよ」

笑顔を作り誤魔化し答える。

「本当に大丈夫なの」

真希が顔を覗き込んでくる。

体を支えてもらっているおかげもあって、体は密着しており、真希の顔が近くてドキドキした。

近くで真希を見てやっぱり綺麗だなあ、と思った。

「なにボーっとしてんの？」

訝しげに見ていた。

「い、いやなんでもないよ」

(みとれていた。なんて言えないしな)

「もう普通に立てるから離していいよ」

(本当はもっとこうしていたかったけど。まあ、しょうがない)

「そう、じゃあ離すけど。」

そして離れた。

まだ心配してくれている真希が訊く。

「歩くの辛いなら肩貸すけど?」

(え、いいの!?)

そんなことを思ったが、これ以上心配をさせたくないのので、断った。

断りはしたが、やはり後悔が大きかった。

(そりゃそうだろ、年頃の俺がこんな綺麗な女子の肩をかりられるなんて、滅多にある事ではないだろ。それに、肩をかりてずっと歩いていたらドキドキで、また倒れるわ! 想像するだけでもドキドキするのに)

そんなことを考えていたところに真希が「じゃあ、行こうか」と、声を掛けてきたので、部屋を後にすることにした。

部屋を出た所は短めの廊下になっていた。

「まあ見る所って言ってもこの先のメインルームくらいしかないんだけどね」

そして、ドアが開けられた。

「おお、広っ」

流石メインルームということだけはあつてとても広かった。

部屋の作りは二階建てで20畳を優に超えた広さがあるが、所狭しに色々な機材が置かれている。

入った場所から右側には、大小様々なサイズの液晶モニターやパソコンが設置されている。

そして、今出たドアとその反対側の壁には二階に上がるための階段がある。

二階はモニターと反対側の方にあり、下から見ている限りでは大

体、一階の三分の二くらいの広さに見えた。

そして、残りの三分の一のスペースであるモニターの上は、一二階が吹き抜けになっており、天井が高く、とても開放感がある。

「すごいな」

ありきたりではあるが、素直で率直な感想を言う。

「そうかなあ、私はもう見慣れちゃってるからねえ」

見慣れていたら感想もそんなところか、そう思いながらまだ辺りを見回していた。

「あつ、復活したですか！」

突然元気な女の子の声が聞こえた。

そして、声の主がこちらに来た。

「元気になったんですね！ よかったです！」

女の子が目の前に来た。

「僕は浅石あさいし 流深るみです！ よろしくです！」

小さくお辞儀をする。

お辞儀をする際、手を前で揃えた時に気が付いたのだが、明らかに服の袖が腕の長さより長い白衣を着ていた。そして何故か白衣にはフードが付いているが、あまり気にしないことにした。

髪型はショートヘアすこしクセが付いている。

明るくて、元気で小さな女の子だ。

「僕はまだ小学生ですけど、立派なこのメンバーなんですよ！」

誇らしげに張ると言うのには成長がまだ足りない胸を張る。

「へえ、すごいね。俺は桜空 創真。よろしくね」

「はい！ よろしくです！」

あいさつを済ませたので、流深は席に戻ってキーボードで何かを打ち始めた。

「元気な子だな」

「まあね」

「それにしても、よくあの手で流深ちゃんにキーボードをうつてるな」
誰もがそう思うだろう。なぜなら、キーボードを打っている最中

も白衣の袖は余っていて、キーボードに垂れ下がっていたからだ。

「やっぱりそう思うよね。だからそれで打ちにくくないの？ って訊いてみんだけど」

「どうだった？」

「『なんのことですか？』って首傾げてたよ。流深にとっては至って普通のことみたいね」

呆れ笑いしながら教えてくれた。

「ああ、そうなんだ」

俺も笑い返した。

そして、もう一つ疑問に思っていたことを訊く。

「さつき、流深ちゃんが？チーム？とか言ってたけど、それはなんだ？」

真希が「ああ、そんなこと」といつて教えてくれた。

「チームってのはそんな大袈裟なものじゃなくて、ここで集まって恵理奈さんの研究を手伝っている人たちのことよ」

「へえそうなんだ。恵理奈さんってどんな研究をしているの？」

「研究って言ってもほとんど自分が作りたいものを好き勝手造っているだけなのよ。それに他の人も、自分がやりたいことを好き勝手にしているの」

「そ、そうなんだ」

苦笑いしながらまた訊く。

「でも、研究所なんだし、依頼あとかは来ないの？」

「たまにはくるけど・・・」

「けど、なんなの？」

「恵理奈さんは自分が興味のあること以外の依頼は全部断っちゃうのよ」

ああ、思わず納得した。

さつき、少ししか会ってないが、何と云うか、唯我独尊というか、周りの人に流されない、そんな雰囲気を持っていたからだ。

「そんなんでここ、維持していけるのか？」

もう、苦笑いしかできない。

「ああ、それなら大丈夫よ」

「どういうこと？」

「恵理奈さんのお姉さんが、いろんな会社とか経営しているのよ。それでそこからお金が入ってくるから、資金的な問題は一切なし、てことよ」

「恵理子さんって色々と凄い人なんだな」

さつきから苦笑いしかできていない。

「もう本当に凄い人だよ。色々・・・」

少し重い空気になった時に、上から足音が聞こえてきた。

音の方を向くと恵理奈さんが階段から降りてきていた。

「なんだ、二人とも私を凝視して」

「いえ、なんでもないです」

綺麗に八モった。

「そういえば、桜空」

「なんですか？」

「お前、今晚の寢床はどうするつもりだ？」

唐突に訊かれた。

「できれば此処に泊めてもらえると助かるんですが・・・」

「泊まることは構わん。ただ飯はないからな」

キツパリと言い切る。

「ないんですか・・・」

「ああ、ない。私と流深の分しか」

「あるんじゃないですか！」

「何度も言わせるな。お前の分はない」

「そんな・・・」

「それに、治療してやったんだ。それ以上を求めるのは贅沢と言っ
のではないか？」

「うっ」

そのことを言われると反論できない。

そんなやり取りに呆れたのか、真希が口を挟んできた。

「あーもう、だったら家でご飯食べてく？」

「マジで、いいの」

「たぶん大丈夫だと思うよ。ちょっと真央に訊いてみるから待ってね」

そういつて携帯を取り出してどこかへ電話をかけた。

「おう！ 待ってる！」

やっぱり真希は良い奴だなっと思って恵理奈さんに一つ訊く

「真央って誰ですか」

「真希の妹だ」

「そうなんですか」

妹がいるんだと思いながら真希に目をやるともう電話が終わっていた。

「OK！ 大丈夫だっつて」

「ああよかった。本当に助かるよ」

真希ちゃんマジ天使！ と思っっていたら一つの疑問が浮かんだ。

「真希ってお姉ちゃんなんだよね？」

「そうだけど」

「なんで家にことを妹に訊くんだ？」

「いや、そのー、何と言うか」

はぐらかしている最中に推理してみる事にした。

(ご飯を作る 料理 妹に訊く、あっ！)

「真希」っと尋ねると、短く「何」と返された。なので俺の推理の答えを尋ねてみた。

「料理できないの？」

「うん」

やっぱりそうなんだ。

「まあ、気にすることはないよ」

「そうだよ、いまだき料理ができなくなっただって生きていけるよね」
壊れたように笑いだしていた。どうやら結構気にしていたみたい

だった。

妹が料理できて、姉が出来ないのか。こんなことを思ったが、余計気にさせるだけだとおもったので訊かない事にした。

「とりあえず、まあ、ご飯期待しておくよ」

「味に関しては、私のお墨付きだから安心して良いよ」

さっきまでの落ち込んでいた態度とは打って変わって、元気になるた。

「そうそう、ついでだしそのまま泊まっていっていいよ」

「え、いいの？」

「いいよ、いいよ。電話した時に、真央に友達が今日、家に泊まってくつて言つていたら、張り切つてご飯作るつていてたから、大丈夫よ」

「男友達をねえ」

半笑いしながら言う。

「別に私は気にしないからいいのよ。それに……」

「それに？」

「なんか変なことしようとしたら、殺すから」

「そ、そんなことしないって」

やべえ、目がマジだった。変なことしようとしたらマジで殺すな、これは。もちろんそんなことはする気はないが。

「ならいいんだけど」

目がまだ怖くつて見る事ができない。

「そうだ、創真」

「何？」

「アンタ、ゲストで家に来るんだしなんか一発芸とかやりなさいよ」

「何で!？」

「いや、だつて泊めてあげるんだからそれくらいしなさいよ」

「でも俺、一発芸とか持つてないぞ」

「だったら、手品でも何でもいいから、なんかやりなさいよ」

「うーん、じゃあ……手品やるか」

「お、じゃあ今何か一つやってみてよ」

「今か!？」

「うん、今」

期待の満ちた表情で返された。

「・・・わかったよ。なんでもいいだろ」

「いいよ!」

「それじゃあっ」と切り出して辺りを見回して使えそうなものを探す。

すると、物干し竿があつたのでこれを使うことにした。

「恵理奈さんこれ使っても・・・」

いつの間にか恵理奈さんがいなくなっていた。まあいいかと思つて。

「それじゃあ、今からこの物干し竿を消してみせます」

二メートル近くある物干し竿を左手でもった。そして右手の人差し指と親指をくつつけて輪を作り、この中を通すと物干し竿が消えると言いつつ放つてから、右手の輪の中に物干し竿を落とした。

「おー」

真希の歓声と拍手が響いた。

無事成功。物干し竿は右手の輪を通つた所から消えていった。

「創真! アンタ思つてたのより、凄いのやるじゃない!」

「それはどうも」

「もう一つやってよ」

「いいけどこれで最後な」

「うん、わかった」

「それじゃあ、なんか適当な布頂戴」

「なんでもいいの?」

「透けてたりしなければいいよ」

「んじゃあこれで」

真希がカバンからミニタオルを取り出した。

「じゃあこれでやるな」

「待ってました」
拍手し歓迎する。

「じゃあ、今からこのテーブルの上に何かを出したいとおもいます」
真希のミニタオルをテーブルの上に敷いた。

「タオルを上にもったからいるからなそれじゃあ、3・2・1」

それーと勢いよくハンカチを捲った。そしてそこには亀がいた。

「大成」

いきなり頭に重たい痛みが広がった。

「痛っ、なにすんだよ」

真希が創真のことを殴っていた。

「なにつてアンタ、勝手にかー君を手品に使わないでよ」

「かー君ってこの亀のことか？ ネーミングセンスなさす、うわっ
いきなり真希に胸座を掴み上げられた。

「今、何かいった？」

（やべ、怒ってる）

「かー君っていい名前だなあって言いました！」

「そうでしょう、そうでしょう」

（よかった、どうやら正解だったみたいだ）

「もう、かー君を手品に使っちゃ駄目だからね」

もうすでに、かー君を元の水槽に戻していた。

「さて、ご飯の時間までまだ大分あるし、手品以外で何しましょう
か？」

（ああ、もう手品は駄目なんですか）

確かにご飯の時間まだにはまだ大分時間が余っていたので、適当
な質問を試してみた。

「ここの発明品とかで遊べる物とかないの？」

「うーん」

唸りながら辺りを見回していた。

「あ、あった」

何か見つけたようだ。

「これなんか結構面白いよ」

そういつて一つの機械を指差していた。

「これ何なの？」

椅子が二つありその椅子から幾つものコードが延びていた。そしてその椅子の上にヘルメットとゴーグルがくつついた物からまたコードが幾つも延びていた。そしてそれらのコードは大きめの箱型の機械に繋がっていた。

「アンタ、これ知らないの！」

「知らないけど・・・そんなに有名な物なの？」

「まあほとんどの人がこれのことを知っているよ。今はほとんどのゲームセンターにも置いてあるし、学校にもある置いてあるしね」

「へえ、そうなんだ。で、これは何なの？」

「バトルコミュニケーション仮想戦闘機よ」

「で、どうやって使う？」

「本当に知らないんだあ。まあ見た通り、ヘルメットとゴーグルを着けて座るだけよ。そうすれば、感覚的には別の世界に飛ばされてそこで自分の能力とか使って対戦できるの。これは古いタイプだけど、新しいのはゴーグルだけで楽なのよね」

「へえ、すごいな！」

「じゃあ、やってみましょう」

真希が張り切っていたが「ちょっと待って」と静止した。

「何？」

「これ、危険とかないの」

「ないよ」

「だって、能力使って攻撃したりするんだろ。怪我とかしないのか？」

「それは大丈夫よ。実際攻撃しているわけじゃないんだから。まあ痛みはあるけど・・・」

「ん？最後のほう何て言った？小声で聞き取れなかったんだけど」

「ああ、なんでもない、なんでもない」
「適当にはぐらかす。」

「それじゃあ、始めましょうか」
意気揚々と椅子に座り、馴れた手つきでヘルメットとゴーグルを装着した。

「じゃあ、俺も、つと」

作業の一つ一つを確認しながらゆっくりと装着した。

装着した瞬間、電気のようなものが全身を駆け巡った様な感覚がし、意識と言うか、精神と言うか、感覚と言うかよくわからないが、何かが無処かに飛んだ気がした。

第1 - 2章

そして、飛んだ何かが戻ってきた感覚がして目を開いた。

「わあっ！」

かなり驚いた、さっきまで部屋の中で椅子に座ってたのに、いつの間にか何処かの公園にいた。

「創真、五月蠅いって」

「あ、ごめん」

先に来ていたのであるう真希が耳を塞ぐ。

「まさか、そんなに驚くとは思ってなかったよ」

笑いながら言う。

「始めてだったもんで」

頭に手を当てながら言う。

「さあ、談笑はここまでよ！ 早く始めましょう」

「え、でも、友達を殴るのは・・・」

「いいのそんなことは、どうせ怪我しないんだし。それに、創真がやる気ないなら・・・」

無言になつて右側の近くにあつた木の方を向いて勢よく、右腕を上から下へと縦に振った。

すると・・・

木の枝や葉が綺麗に切断されていた。

「一方的に痛めつけるから」

今までの中で一番の笑顔だった。

（ヤバイ、これは本気でやらないと駄目だ。適当に負けたら、これが終わった後、さっきの攻撃をされそうだ）

冷や汗が止まらなかった。

「そ、そういえばこれって、勝敗はどうやってつけるの？」

簡単に勝敗が付きますように！ 心の中で必死に祈っていた。

「簡単よ、相手を気絶させるなりとりあえず戦闘不能にすればいい

の。後は・・・」

(後は何！ とりあえずその方法は余り取りたくない)

「ギブアップもありだけど、認めないから」

(ああ、そうですね、そう言うと思ってました)

俺の中での真希の性格認識の、明るくてだいぶ強引な性格に、ドSと言うのも追記しよう。

「じゃあ、覚悟は出来た？ いくよ！」

真剣な声色で言った。

(しょうがない、やるしかないのか)

「よし、こい！」

俺が言った直後、真希が手のひらを俺に向けてきた。

(真希の能力は風 空気砲のようなものか！)

そう考えて、勢いよく左に転がるようにしてかわす。

(ビンゴ！)

かわした直後さっきまでいた所に物凄い勢いで風が通り抜けた後の残風を感じた。

「初めてにしてはやるじゃない！」

初手を避けられたのが悔しそうに見えた。

「まあ、勘だったかな」

笑って見せた。

「次は外さないよ」

言い放って、右手を右から左へ、左手を左から右へと払った。

(これはさつき木を切ったのと同じ能力、左右に逃げるには間に合わない、なら！)

体を横向きにし、風の刃に上下を挟まれるように跳び、風の速さに合わせ体を空中で一回転させてかわした。

「どつだ！」

「！」

かなり驚いた顔をしていた。

「今度はこっちの番だ！」

徐にポケットに右手を入れた。

「さっきの手品の続きだ！」

ポケットから手を抜くと、先程、手品で使った物干し竿が出てきた。

「武器は無しとか言わないよな」

「使ってもいいけど、そんなの簡単に切り裂けるのよ」

先刻同様右手を左から右に払って風の刃を飛ばす。

「甘い！」

物干し竿を下から上へと振り、風の刃を弾き飛ばす。

「側面叩けば大丈夫みたいだな」

「ばれちゃった」

悔しそうだが、楽しそうにも見えた。

「ならこれで、どう！」

今度は縦に風の刃を三発ほど飛ばしてきた。

「何度やっても同じだ！」

一発目の右側を弾き、二発目は左側、三発目の右側を弾いた時に視界の隅で捕らえた。

正面からだけではなく、右側からも一発風の刃が飛ばされていた事に。

三発目を弾いた勢いのままに、体を素早く左回転させ、竿の先端が軸に若干遅れながら、弧を描く。

（間に合え！）

弾いた手ごたえを感じた。が

カラ　ン、

金属が地面に落ちた音がした。

物干し竿の先端が鋭くとがっていた。

「マジですか」

顔が青ざめた。

なぜなら、物干竿が切り落とされていたからだ。

「ツチ、後少しだったのに」

(そこ、普通に舌打ちするんですか！ 未恐ろしいわ！)

(とりあえず、頭を切り替えよう。うん)

「こ、こんどはこっちから行くぜ！」

真希に向かつて勢いよく駆ける。

距離を詰められるまいと、風の刃を幾度と飛ばしてくる。

風はどうやら直線上にしか飛ばせないようなので、すべて鼻先を掠めるか否か、と言うタイミングで体を捻りかわす。

残り二、三步で真希の目の前つと思つた刹那。

創真が真希の後ろに回りこんでいた。

「えっ！」

真希が思わず声を漏らす。

だが時すでに遅し、創真が真希の脚へと回し蹴りをかます。

真希の体が後ろに倒れている間に、創真が低い低背の状態まま真希の背中へ向け蹴りを放つたその刹那、突風が吹き創真を吹き飛ばし、真希の体制を立て直した。

「創真！ やるじゃない」

「やるだろう」

得意げに返す。

「こんな強い相手、トーナメントでも中々いないわよ。」

真希が楽しそうな顔をしていた。

「ん？ なんだ、トーナメントって」

「この戦いが終わったら教えてあげるわよっ」

言い切つたと思いきや、いきなり創真の後ろから突風が吹き、真希の方へと飛ばす。

飛んでくる創真に向けて、真希が蹴りを放つた、が、蹴りを掴まれ、風の勢いを利用して、脚を掴んだまま真希とすれ違い、半円を描くように勢いを利用して真希を投げた。

地面に着く寸前、手を地面に着け回転受身を取るかのように回り、

すぐさま体制を立て直す。

(迂闊に技を出すと逆に利用されるわね、どうしたら良いのかしら)
「どうだ？ 降参するか？」

創真がおちよくるように言う。

(このまま調子に乗せるのも癪だしどうするか・・・)
そこには一つの考えが浮かんでいた。

「創真！ 次で決めるよ」

「いいよ、かかって来な」

真希は手を上に掲げ、そして、勢いよくおろす。

ダウンバースト

(直下空塊！)

「えっ？」

物凄い量の空気の塊が創真を襲った。

中心から外に向けて円を描いて風が吹き抜ける。

「ふう、終わったあ」

風になびいている髪を押さえている。

地面は外から中心へと向かうにつれて陥没していった。

足元には、直撃を受けて伸びている創真がいた。

第1 - 3章

また、意識と言うか、なんていえば良いのかわからない感覚が飛ばされた。

「どうやら意識が戻ったようだ。」

「あー楽しかった」

満面の笑顔で真希が、ヘルメットとゴーグルを外して立ち上がった。創真もヘルメットとゴーグルを外して一言叫ぶ。

「殺す気か　！」

こんなに大きな声は出したことが無いと言っくらしいの声を出した。だが、当の本人は「ん、なにが？」と、見当がついていなかった。

「あんなもんくらつたら、普通死ぬわ！」

「そんなことないから、大丈夫、大丈夫」

「いや、でもめっちゃ痛かったし！」

「最初に痛みはあるって言ったじゃん」

「言ってなかっただろ！」

俺に向けて指を指して一言。

「聞いていなかったアンタが悪い」

「絶対にそんなこと言ってな」

「それにしても、創真強いわねえ」

俺の言葉を無視して話し始めた。

「初めてって言った割には強すぎる」

「確かに強いな」

いつの間にか恵理奈さんがいた。

「それによく真希の攻撃を完璧に見切ったな」

「ああ、確かに。アンタ、もしかして風使いなの？」

訊かれたので「違う」と答えた。

「じゃあ、なんでわかったの？」

「実は俺、目がめっちゃ良くてな、それで何となく見えるんだよ」
「えっ、すごいっ」

真希が目を見開いて驚いていた。

「そんな、すごいのか？」

「すごいことだよ！ だって、風使い以外普通、私の攻撃わからないのよ」

「そうなんだ。でも、俺じゃなくても避けれると思うよ」

「どうやってよ？」

「能力を使う時ってイメージするのが重要だろ」

「んまあ、そうだけど」

「それで真希は攻撃する時、いつも手で刃をイメージするように、腕を振ってたじゃん。だから、その先を辿って行けば攻撃が来る場所もわかるってこと」

「ふ〜ん。じゃあ横から放ったやつは？ あれは見えてないと避けれないと思うけど？」

「それはさ、真希の目が右から左へと動いていたからだな」

「なんでそれだけでわかるのよ？」

「普通、戦闘中に余所見しないしだろ。それに、生えてた草の上が切れながらこつちに来てたからだな」

「よく見てるわね。それじゃあもう一つ」

素直に関心した後、何かを訊く。

「私の後ろに回りこむ直前、消えなかった？」

「ん、いや、消えてないけど」

「絶対消えてた！」

物凄い剣幕で迫ってくる。

「き、気合で頑張った」

勢いに押されつつ答える。

「んまあ、それで納得しといてあげるわ」

「じゃあ今度は俺からの質問な」

「いいよ、何？」

「トーナメントってのは、何なんだ？」

「それわね、この仮想戦闘器を使った大会よ。最初は学校代表と、一般参加の地域代表を決めて、次は地区、次はエリア代表を決めて、最後は各エリア代表たちによる決勝リーグがあるの」

「ふ〜ん。結構大きい大会なんだな。真希は参加したのか？」

「したわよ。私は個人戦で地区まで行ったけど、飽きちゃって途中で辞退したの。恵理奈さんと流深はタッグ戦で地区まで行ったけど、私と一緒に辞退したの」

（つまりは、楽しめる相手がいなかったことか）
いきなり真希が話を変える。

「そついえば、創真の能力ってなんなの？」

「え、俺の能力？」

「うん、そつ」

「なんなんだろうな。調べたことないから、わからないんだよ」

「え、何で？ だって学校の能力検査で必ず調べるじゃない」
本当に不思議そうな顔をしていた。

「俺、学校って行ったことないんだよね」

頭を掻きながら、寂しげに笑う。

「あ、そついえば・・・」

創真が施設にいたということ思い出していた。

「でも、施設って言っても学校くらいはいけるでしょ」

「まあ、普通の施設とかなら学校にも行けていたのかもな・・・」

「そんな、どんな所なのよ！ 場所教えなさい！ 文句言いに乗り込んでやる」

本当に今にも乗り込みに行きそうな勢いだった。

「無理だし、やめた方がいいよ」

「なんでよ！ 学校も行かせないとか、どう考えてもおかしいでしょ」

俺なんかの為に本気になってくれていた。

こんなことは初めてだった。

「その気持ちだけで十分だよ。ありがとう」
何なんだろうこの気持ち。

人に心配してもらおう、と言うことが初めてだから、モヤモヤしてるのか？ なぜか目頭が痛くなってきた。

「本当に、ありがとう」

目の辺りに突然熱いものが込みい上げ、なぜか涙が出てきた。見られたくないので顔を伏せた。

「どうしたの！ 創真？」

「なんでも、ないよ」

「だって泣いてるじゃない」

「自分でもわからないんだ」

「そう・・・」

真希が創真の肩に手を置いて顔を覗きこんできた。

「ねえ、創真」

優しい声だった。

「辛いこととかあったら相談しなさい。必ず私はあなたと一緒に悩んであげるから。苦しんであげるから。その悩みが解決するまで私は絶対あなたに背を向けない。逃げない。だからいつでも頼りなさい。わかった？」

何も考えず素直に頷いていた。

「でもなんで、俺のことをそんなに気にかけてくれるんだ？ まだ、出会ったばかりだって言うのに」

真希が諭すように言う。

「あのね、出会ってからの時間なんてものはどうでもいいの。そんなものよりも、今、自分が相手をどう思ってるかってことが重要な。今、私は創真には辛い思いをして欲しくない。だから、辛かった、苦しかった、そんなものが無かったって思えるくらい、楽しいこと、面白いことを作っていきたくって思ってるの」

(俺のことをここまで真剣に考えてくれるなんて)
止まりかけていた涙が、戻ってきた。

「それにね、困っている人がいたら助ける。ただそれだけのことよ。だからもう泣かない、ほらいい顔がだいな・・・しでもないけど。まあ、はい」

そこは、いい顔って言うてよ！ と、思いつつも差し出されたミニタオルで顔を拭く。

「あのさあ、一言言っただいい？」

「何？」

「このタオル、臭いんですけど・・・」

「えっ？・・・あっ！ アッハハハ」

何かを思い出して、急に笑い出した。

「何で笑ってるの？ 笑うところ無かったでしょ！」

折角の感動的なムードが一気に晴れた。

「だってさ、それ、さっき、かー君出す時に使ってたじゃん」

爆笑しながら答えを出す。

「あーだからかって、だったら別のくれればいいじゃん！」

「だって私、タオルそれしか持ってなかったんだもん。しょうがないじゃん。それはかー君を勝手に手品に使った罰だと思いなさい。

自業自得よ。うん。」

罰だったらその直後殴られた気がするんだが、まあこのことを言っても話が面倒臭くなりそうなのでやめた。

笑い涙を拭って真希が話し出す

「それじゃあ、その施設の場所を教えなさい！」

「この話の流れで、なんでそうなる！」

「もう、創真のこととか関係なく、私個人としてそこが許せないの！ だから、喧嘩の押売りに行く訳」

「いや、やめた方が・・・」

「嫌、やめない。絶対に潰す。だから、場所を教えなさい！」
物凄い剣幕で迫って来た。

「んじゃあ、教えるけど、たぶんそこまで行けないと思うよ」

「いいから言いなさい」

重たい口調で言う。

「場所は、エリア35より先のどこか」

「え？」

さっきまでの勢いが嘘のように静まり返ってく。

「エリア35って、あのエリア35？」

目をパチクリさせている。

「ああ。そうだよ」

エリア35 並立空間を大きく四つに分けた際、フロンティアエリア最先端区域に
当たるのが、エリア35以降である。

ここでは、様々な実験、研究が行われており、並立空間を支える
科学技術の結晶である。

セキユリティーがかなり頑丈な為、侵入は不可能と言われている。
一部の者しか出入りができない為、一般人は中がどうなっている
か知らない。

「エリア35にそんな児童施設みたいなものってあるんですか？」

さつきからずっと無言で二人のやり取りを見ていた恵理奈さんが
答える。

「わからん。私は中に一度入れさせてもらったことがあるが、そんなものは見ていない」

「じゃあそこから逃げ出すことって出来そうですか？」

「物を破壊することに長けた、上位の能力者なら可能かもしれん」

「だとすると侵入は無理かあ」

「だから侵入することはやめようって。それに俺はもうあそこには
関わりたくないし」

「そう・・・じゃあしょうがない。諦めるわよ」

よかった。諦めてくれた。

「あそこに招待されたってことは、恵理奈さんって優秀な科学者な
んですね」

「まあな」

「では、なんで向こうで研究所を持つと思わなかったんですか？
向こうに行けば、ここよりも凄い設備を得ることができたのに」
「私はあそこのやり方が気に食わなかったからここに来た。向こう
に居たら、歯車の一部で終わりそうだからな」

「そうですか」

真希が「創真」と、尋ねてきた。

「何？」

「アンタ、学校に行きたい？」

「まあ、行けることなら行きたいよ」

「よし！ それじゃあ行こうか」

「ええ！ 行けるの！？」

「ええ、たぶん。大丈夫ですよ。 恵理奈さん」

なぜ、恵理奈さんに訊くんだらうか？

「問題ないだらう」

「それじゃあお願いします」

恵理奈さんが携帯を取り出して何処かへ掛けた。した。

啞然として二人のやり取りを見ていた俺に、真希が説明する。

「恵理奈さんのお姉さんは、私の通ってる学校の理事長もやっ
てるから、編入するくらいは簡単に出来ると思うよ」

「そうなんだ。それっていろんな会社を経営しているって言う人と
同じなの？」

「そうよ」

「すごいなそれ。ってことは私立か？」

「そうね、でもいいところよ」

そんなこんなで恵理奈さんが戻ってきた。

「大丈夫だそうだ」

「お、よかつたじゃん」

(マジか、学校行けるのか)

「ちゃんと、編入試験さえ受ければ問題ないそうだ」

「あーそうなんだ」
真希がお気の毒様つと言いたげな視線をおくってくる。
「創真、アンタ勉強できるの？」
「んんまあ、それなりには」
「結構難しいから大変かもよ。私なんか合格ギリギリだったし」
「正確にはコネを使って補欠合格にしたがな」
恵理奈さんが正す。
「まあそうなんですけどね」
頭を掻きながら微笑む。
「そうなんだ」
俺は苦笑いをする。
「そういえば、編入試験っていつなんですか」
恵理奈さんに尋ねる。
「明日だ」
「え！？ 明日ですか」
「そうだ、問題あるか」
「いえ、ないです」
「それと、適当に偽造書類を作るから別の苗字を決めろ」
「何ですか」
「桜空と言う苗字はそんなに多くないからな。カモフラージュだ」
「別に何でもいいですよ」
「それじゃあ」
いきなり真希が割り込んできた。
「面倒くさいし、もう、佐藤とか田中でいいんじゃない？」
「そういう決め方は全国の佐藤さん田中さんに失礼だろ！」
「あ、そう。じゃあ、アンタが勝手に決めなさい」
「うーんじゃあ、平井とかは？」
「まあ、別に悪くないんじゃない？ じゃあ平井に決定！」
「わかった。平井でいいのだな。それで書類を作っとく」
「はい、お願いします」

「それともう一つ、真希とは従兄弟と言う事にしておくからな」
「なぜですか？」

「その方が何かと都合がいいからだ」

「そうですね・・・」

真希も嫌そうな顔をしたが、何も言わないと言うことは賛成と言うことだろう。

「じゃあ頑張れ」

言っでどこかへいった。

「はあ〜明日かあ〜」

ため息を吐いて、肩を落とす。

「まあ、ドンマイ。何なら私が勉強教えてあげようか？」

と、肩を叩く。

「別にいいよ、真希に教わっても意味なさそうだし」

「何？ 私が馬鹿だとも言いたいなの？」

「そんなこと言ってますん」

睨まれたので目を逸らす。

「ただ、今から勉強しても余り意味がないと思ったので」

「本当に？」

「はい！ そうです」

「ん〜ならいいけど」

とりあえず、睨むのはやめてくれた。

「それじゃあ、もうそろそろ家にくる？ それとも、もう一戦やる？」

「真希の家に行こう！」

即答した。

（もう一戦するのは勘弁して欲しい。あんなもん、何回も食らって
いられるか！ 流石に次からは避けさせてもらおう）

「そう… じゃあ行こうか」

少しガツカリしていたが、行く気になったようだ。

そして、研究所の外に出た。

「うん」

創真が大きく伸びをした。

「なんか、久しぶりの外って感じた」

風を気持ち良さそうに浴びている。

「久しぶりってそんなに日にち経ってないでしょ」

「そうなんだけど、こんな伸び伸びとした気持ちで外にいるのってかなり久しぶりなんだよ」

（そういえば、エリア35以降って全部建物中なんだけ。それに逃げて来たんだったら、ゆっくりしていられなかっただろうしね）

「よし、それじゃあ少し散歩でもしてから家に行こう」

「え、まあ、いいけど」

少し不思議そうに真希を見ていたが、気にしないことにした。

「どこか行きたい場所ある？」

「ここら辺わからないから、真希に任せるよ」

「そう、じゃあ付いて来て」

第1 - 4章

歩くこと数十分、広い公園に着いた。

「ここは？」

「ここは、創真を拾った、御友高校前公園よ」

「拾ったって俺は物扱いですか！」

「そんな細かいこと気にしない」

「そうですか・・・」

(どうせ、しつこく訊いても全部流されるんだろうな)

「ついでに、ここ先の先に明日アンタが行く学校があるから」

「そうなんだ。御友高校っていうのか？」

「そうよ。ついでだし、学校も見に行く？」

「いいよ、どうせ明日行くんだし。それよりも少しここでゆっくりして行きたいし」

「そう、じゃあそうしようか」

「うん」

近くにあつたベンチに座るなり、唐突に創真が口を開いた。

「なんかさ、いいよな、こついうの」

「どんなのよ？」

「こつやって、ゆっくりと景色を眺めてたりするの」

そして、空を見上げた。

「空も綺麗だしさ」

夕刻になり、見事な茜色に染められた空を眺めている。

釣られて真希も眺める。

「本当だ・・・」

空がこんなにも綺麗だったなんて始めて気づいた。

(今まで、当然のように見てきていたものが、これほど美しく見えるのはなぜだろう？)

この、止まるような時の中で眺めているからだろうか？

ほのぼのとした気持ちで眺めているからだろうか？

それとも、創真が隣にいるから？・・・それはないな。うん（それから、二人はどの位の時間空を眺めていたのだろうか？

気がついた時には、夜空が茜空の半分を暗く染められていた。

「ほら、創真いつまで空見てるの？ 真央がもうご飯作り終わってる頃だし行くよ」

「もう、そんな時間なのか。じゃあ行くか」

名残惜しげにベンチから立つ。

「あ、ずっと空見てたから首が」

創真がボキボキと首を鳴らす。

「そんなことしてないでサッサと行くよ」

体を伸ばしていた創真を急かす。

そして公園を後にして、真希の家へと向かう。

十分ほど歩いていたら真希家に着いた。

「ここが、私の家よ」

周囲の住宅にも馴染んでいる二階建ての家だった。

「よくありそうな家だな」

「文句があるなら野宿でもする？」

笑顔で脅迫をする。

「そんなことないので野宿は勘弁！」

手を合わせて頭を下げる。

「そう、じゃあ入って」

真希がドアノブに手を掛けドアを開ける。

「ただいまー」

勢いよく中に入る。

「おじゃまします」

恐る恐る入る。

「いらつしあ」

驚いた顔で固まっていた。

「お、姉え、友達ってその人？」

「そうよ」

疑いの眼差しで。

「彼氏の間違いじゃなくて？」

「違う　！」

「そんな、恥ずかしがっちゃって」

「恥ずかしがってなんかないって。いいから、創真も上がちゃって」

「ほら、下の名前で呼んじやって。やっぱり彼氏なんじゃないの」

「だから違うって」

言いながら真央ちゃんにデコピンをする。

「痛っ。えーと、創真さんでしたっけ？　早く入って下さい」

笑顔が向けられた。

「え、んあ、うん」

二人のやり取りに呆気にとられていた俺に声が掛けられた。

ようやく靴を脱ぐことができた。

（真希も元気だけど真央ちゃんも元気だなあ。賑やかそうでいいことだ。うん）

「それじゃあ、もうそろそろでご飯ができるので、リビングでいちゃいちゃしてて下さい」

俺は苦笑いをし、真希は「するか　！」と、叫んでいた。

真央ちゃんは廊下を真っ直ぐ行った所にあるキッチンへと向かう。

「元気な妹さんで」

「元気なんだけど、いつもあんななのよ」

「それは、大変そうで」

廊下を少し進んで左側にあるリビングへと入る。

リビングに入るなり創真が「それじゃあ」と、言い出したので「

何」と、尋ねる。

「真央ちゃんの許可も得たし、いちゃいちゃするか」

「そう、じゃあ、目を瞑って両手を広げて」

「どうか？」

「そう、よー！」

そして、創真の鳩尾に思いっきり拳をぶつける。

「がっ！」

短く言葉を発して創真が倒れこむ。

「ま、真希さん？ あの」

引き攣った顔で真希を見上げる。

「ん、なにもう一発お願いします。そう、わかった。じゃあもう」

ば

「ふざけた事言ってますいませんでした！」

土下座をして謝る。

「そう、それじゃあ、許してあげるわ。だから、顔を上げなさい」

「あ、はい」

真希がデコピンをするかのように、人差し指と親指を合わせ、それを弾いた。

刹那、俺の髪の毛先が切られた。

「次そう言うこと言ったら、どうなるかわかるわね」

「は、はい」

背筋がゾツとした。

（ちよつとふざけただけなのに、ここまでしなくてもいいんじゃない・・・）

「じゃあ私、真央を手伝ってくるね」

「料理できないんじゃない？」

「食器出したり、料理を運ぶ位ならできるから」

手を振りながらキッチンへと向かった。

今日初めての一人の時間だ。

何をすればいいのだろう？ わからない。

とりあえず、仰向けに寝転んで考えてみることにした。

ふと、真希って本当に良い奴だなあと、思った。

そりゃあそうだろう。こんな、見ず知らずの俺なんかを助けてくれて。こんなに、良い人が本当にいるんだな。

今日一日を振り返ってみて感じるのが、今までこんなに楽しい日って言うのは初めてだしな。

不思議なことは、まだ真希と出会ってから一日しか経ってないのに（実際は昨日拾われたのも入れて二日）こんなに仲良くなれていくってことだ。

この一番の要因は真希が気を使って親しくいてくれるのが大きいだろうな。

一日ってこんなに短かったんだな。

今までは、早く過ぎ去れ、と思ってた時間がこんなにも愛おしく思えるなんて。少し前の俺には信じられないだろうな。

自嘲気味に思う。

ふと、キッチンを見てみた。真希が丁度食器を運んでいた。

あれで躓いたりしなかなあ、と思っただらそうだった。

食器を落として割れるかと思いきや、地面に着くギリギリの所で風を起こして食器を浮かせていた。

真央ちゃんに叱られてるのを見ながら、真希にばれない様に忍び笑いをする。

普段はしっかりしているのに料理が絡むと、すっかり駄目になるのかな。

なんかもう見るに耐えないので手伝おうとキッチンへと歩みを進める。

「俺が、手伝おうか？」

「大丈夫！」

真希が即答する。

「いや、大丈夫そうに見えなかったから声掛けたんだけど」

「大丈夫たら、大丈夫なの！」

フライパンを持って張り切っている。

「もう、お姉え彼氏の前だからって無理しちゃって」

「誰が無理してるって？」

笑顔でフライパンを振り上げて今にも殴りそうだった。

「いつもやってることだから大丈夫だよな」

真央ちゃんが急いで訂正した。

「そうでしょ」

(冗談でも妹にこんなことするって、真希恐ろしいな)

こんなことを思ったがこれを口にした瞬間、ターゲットが俺に変わるの、言葉を飲み込んだ。

「じゃあ他に何かすること無い？」

「うーん、じゃあお風呂洗ってきて」

「了解。で、場所どこ？」

「そこで左側の所」

廊下を指差しながら言う。

「おう、わかった」

そして、去り際に一言

「黒焦げの何かは勘弁してくれよ」

そう言い放ち、急いで風呂へと向かう。

「創真、アンタちょっと待ちな・・・っていないし」

「流石彼氏だけはあってお姉えのことわかってるみたいね」

「だから・・・もういいや。否定するの疲れたわ。後は任せる」

フライパンを真央へと渡し、リビングへと向かう。

「さて、勢いで風呂洗いをする事になったがどうすればいいんだ？」

風呂場に入り腕を組み悩む。

「そうだ、まずはズボンを捲ろう。このままでは水が掛かってしま
う」

言い放ち、ズボンを膝下まで捲りあげる。

「まずは第一段階クリアだな。あ、靴下脱いでなかった！」
急いで脱ぎ脱衣場へと放る。

「風呂洗いって言うんだし、まずは洗剤とスポンジを確保しないと」
スポンジはすぐに見つけたが、洗剤を探すのに苦労していた。

「何でこんなに容器が沢山ある。とりあえず虱潰しに探すか」
最初に手にしたもの　シャンプー。

二番目　トリートメント。

三番目　ボディソープ。

四番目　シャンプー。

五番目　シャンプー。

「なんで、シャンプーが三つもあるんだ！」

思わず大きな声を出してしまった。

外から声がした気がしたが、気にしないでおこつ。

六番目　浴室用洗剤。

「ビンゴ！」

手に持っているこれと、今まで手に取った五つの物を見比べて気づく。

「これだけ、スプレーの形してたじゃん」

俺ってばかだなあと思った。見た目的に明らかに違つこれをなぜ最初に取らなかったのかと。

「後はこれを吹き付けて浴槽を磨けばいいのか、と」

浴槽の中に洗剤を噴射する。

「うわあ、泡が出た」

今までの行動を見ていてわかる通り、風呂洗いなどと言う行為が初めてなので驚いていた。本人は至って真面目に行っているのだが、旗から見たらただの変人だろうな。

噴射する度に不思議に思いながらも何箇所かに洗剤を飛ばした。

「よし、第二段階クリア。後はこれを伸ばしながら磨けばいいんだな」

流石にこの段階ではなんのトラブルも無く磨き終わり、泡をシャ

ワ―で流す。そして、栓をする。

「よし、後はお湯を張って終わりか」
給湯と書かれたボタンを押した。

「おわったあ―」

両手を高く突き上げ体を伸ばす。

「風呂を洗うのがこんなにも大変だったとは知らなかった」
風呂場をでて、脱衣場で足を拭き、リビングへと向かう。

第1 - 5章

「あー疲れた」

リビングに入るなり座り込む。

「なんか、妙に騒がしくなかった？」

テレビを見ていた真希が訊く。

「気のせいじゃないか？」

答えながらテーブルへと目をやる。

そこには、和洋折衷色々な料理が並べられていた。そして、一番、目を疑ったことは。

「黒焦げの何かがない！」

思わず声に出してしまった。

すると、真央ちゃんが笑いながら入ってきた。

「創真さんがいった後、お姉えはフライパンを私に渡したからその事態は防げました」

「ああ、やっぱり前科あったんだ」

「だからお姉えは禁止なんです」

「そんなことどうでもいいから早く食べましょ」

「はいはい」

嘆息しつつも、真央ちゃんが最後に持ってきたご飯を並べる。

「それじゃあ、食べましょうか」

真希が声を掛ける。

「……いただきまーす」「……」

(久しぶりのご飯は賑やかに、楽しく食べれそうだな)

とりあえず、一番最初に目に付いた煮物へと箸を伸ばす。

「うわ、これ、うま！」

そして、次々目に付いた料理へと箸を伸ばす。

「これ、全部めっちゃ美味しいよ。真央ちゃん本当に料理上手だね」

「だから、私のお墨付きって言ったでしょ」

なぜか、真希が誇っている。

無視して真央ちゃんに話しかける。

「これなら、絶対良いお嫁さんになれるよ」

「それじゃあ、創真さんのお嫁さんになっちゃおうかな」

創真のお腹の辺りに飛びつく

「それじゃあ、お願いしようかな」

真央ちゃんの頭を撫でる。

「創真！ 私の妹に何してんのよ！」

「あれ、まさかお姉え、妬いてるの？」

「べ、別にそんなんじゃないわよ」

「ご飯を黙々と食べ始めた。そしてすぐに。」

「ご馳走様」

(早、もう食べ終わったのか)

「じゃあ私お風呂入ってくるから」

真希がリビングを出て行く。必然的に真央ちゃんと二人きりになった。

「創真さんってお姉えこと好き？」

「んまあ、好きか嫌いかわたら、好きだよ」

「どこら辺が？」

「あの性格かな」

「なるほど、暴力を振ってくる人が好きってことは創真さん、ドM？」

「ちがうわ！ 好きなのはあの親切な性格だ。てか、普段から暴力的なんだ」

半笑いしながら訊く。

「まあね。でも特に創真さんには強めかな？ さっき、思いっきり殴られてたでしょ」

「ああ、見られてたんだ」

「でも、お姉えに殴られても怒らないであげてね」

「なんで？」

「お姉えは嫌いな人には殴る以前に、関わらないようにする人なの、そんなお姉えが殴るのは、自分が本当に思ってる事を表現するためだと思うの。お姉えなりの愛情表現みたいなものだから、受け取ってあげてね」

空笑いしながら答える。

「それじゃあ、俺も愛情表現として殴り返してみるか」

「それは、やめた方がいいよ。倍返しで来るから」

「こっちからはだめなんだ」

「うん。殴られるとイラっとするんだって」

「確かにそう言うタイプだな、あれは」

「よくわかってるね、お兄い」

屈託の無い笑顔が向けえられる。

そして、放たれた言葉をなぞって驚く。

「お兄い!?!」

「お姉えと結婚したらそうでしょ。だから、お姉えのことお願いします」

ぺこりと頭を下げ笑顔が向けられる。

「確かにそうだけど。俺たち付き合ってもいないし」

「そうならない予定もないからいいですよね。お兄い?」

「まあ、呼び方はなんでもいいけど」

(やべえ　！　結構萌えた。お兄いなんて呼ばれるのは初めてだ。それに真央ちゃん結構可愛いんだよな。確か小6って言ってたけ。

いや、俺が決してロリコンって訳じゃなくてな、ホント普通に可愛いんだよ。将来有望だな。うん)

「どうしたの？　ポーっとしてるけど?」

自分の世界に入っていた創真のことをつつく。

「ん?　いや、なんでもないよ」

(危ない危ない。完璧に自分の世界に入り込んでしまつところだった)

そして、その後も他愛もない話をし続ける。

と、そこに風呂から上がった真希が髪を拭きながら入ってくる。
「次、どっち入るの？」

もう、結構時間が経っていたのか、話に耽っていて気づかなかつた。

「お兄い先に入っちゃって下さい。私、食器を洗ってますから」

ちよつと真希の前でお兄いは、と言おうと思つたが真希が無反応だったので止める事にした。

「あつ、俺そういえば寝巻きとか無いんだつた」

「そうなの、んじゃあちよつと待ってて」

真希が部屋を出て何処かへと向かう。

階段を上る足音が聞こえたので、二階の何処かの部屋だろう。

今度は下る足音が聞こえて、真希がリビングに戻ってきた。

「はいこれ」

一着の服が差し出される。

「これ、ですか？」

差し出された物はどう見ても、女性物のパジャマだった。

「そう。つてのは冗談でこれね」

今度は男性用の寝巻きが渡された。

「はい、真央」

さっきのパジャマが真央ちゃんへと渡される。

（よかつた、本当に着させられるかと思つた）

「ありがと、お姉え」

「じゃあ、俺は風呂に入ってくるわ」

手を振りながらリビングを出て行く。

「じゃあ、私は食器を洗うから」

真央ちゃんがキッチンへと向かう。

必然的に真希が一人でリビングに一人で取り残された。

「ちよつと、なんか置いていかれるの嫌なんだけどー」

真央に付いてキッチンに行く。

「よし、私が手伝ってあげるわよ」

真希が張り切る。

「えー」

真央があからさまに嫌そうな声を漏らす。

「何よ、その嫌そうな態度？」

「だつてお姉えっ絶対食器落とすでしょ」

「そんなことないから大丈夫」

笑顔で親指をグツと立てる。

「その笑顔の自身はどこからくるんですか」
呆れ気味に突っ込む。

「よし、それじゃあ」

早速、お皿を手に取る。が、やはり落とした。

「あつぶない！」

急いで風を起こし、食器を中に浮かす。

「・・・・・・・・」

「何、そのやつぱり見たいな視線は」

肩に手を当て諭すように一言。

「お姉えせめて一枚位は洗おうよ」

そして、もう一言。

「邪魔だからあつちでテレビでも見せて」

真希をリビングへ行くように促す。

「はい」

真希がシヨボンとした、重い足取りでリビングへと歩き出す。

そして、リビングに着くなりテレビを見始める。

そのまま会話がないまま、時間が流れ、真央が食器を洗い終え、

リビングに赴く。タイミングよく創真が、お風呂から上がってきた。

「いや〜久しぶりの風呂は気持ちよかつたあ」

髪を拭きながら、さつぱりしたと言っ感じの顔をしていた。

「それはよかつたね」

何故か真希が不機嫌気味に返す。

事情を把握するために真央ちゃんに耳打ちで「何があつたの？」

と、訊く。

「さつき、食器洗うのを手伝ってくれようとして、お皿を落としかけてたから、向こう行ってて行ったからかな」

「そんならいい」

呆れつつ笑うが、らしいと思った。

「では、私お風呂に入ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

さて、真希に話しかけてみるか。

「真希？」

「何」

「今日泊めてくれて本当にありがとうな」

「まだ、そんなこと気にしてたの。友達なんだからそんなこと気になくていいよ」

「真希にとつては、そんなことなのかも知れないけど、俺にとつては大きな事なんだよ。泊めてくれたことだけじゃない、今日一日あったこと全てに感謝したい。こんな風に普通な感じの生活をしたかった。そして、真希は叶えてくれた。だから、ありがとう」

「べ、別に感謝なんかどうでもいいから」

照れているようにも見えた。

「それに、私は叶えてあげてなんていないよ。強いて言うなら、きっかけを作っただけであげられたに過ぎないから。それに、感謝するとしても早すぎるわよ。たった一日でそんなに感謝されちゃこれから学校生活が始まったらどうするの？ こっちが疲れるから止めなさい」

「うん、そうだな」

空笑いをしながら答える。

「そうだ」

いきなり真希が言い出した。

「学校行くの決まったとして、その後何処に泊まる気？」

「あっ」

そういえばそうだ、まだ決まっていなかった。

「行くあては？」

「ないです」

「じゃあ、ずっとウチに泊まってく？」

「それは流石にご両親に迷惑じゃ・・・」

「大丈夫よ、親くないし」

え、なんか訊いちゃいけないこと聞いた気が・・・

「ごめん」

「何で謝るの？」

「だってご両親のこと・・・」

「ん、ああ、ちょっと言い回しが悪かったわね。正確には家には帰ってこないの」

「どういうこと？」

「私の親はどっちも最先端区域で働いてて帰ってこないの」
亡くなつてるとかじゃないのかあ、と心の中で安堵する。

「凄い方なんだな」

「まあね」

誇らしげに答える。

「いつ向こうにいったの？」

「確か私が八歳位の時だからもう七年も会ってないのか」

「そうなんだ・・・」

だからさつき誇らしげにしていたのだけれど淋しげにも見えたのか。

このままだと、どんどん暗い方に行きそうなので話しを変える。

「これからは俺もここで暮らすわけだし、楽しくやっていこうな」

「そうね」

そして、テレビを見ながら駄弁り始める。

駄弁っていたら、最後にお風呂にはいった真央ちゃんが戻ってきた。

「真央、話しあるから来て」

「何？ お姉え」

「創真が此処で暮らすことになったから」

「え？・・・！」

呆然してから少しして、いきなり目を輝かす。

「ということは同棲！ 結婚間近！ うん、お姉え仲人は私に任せ
てね！」

「違うわ！ それに、仲人頼むなら恵理奈さんにするわ！」

大声で即効で否定する。

「わかった、恵理奈さんに仲人頼みに行ってくるね！」

今にも飛び出して行きそうな所を真希が急いで止める。

「行くなー！ それに私たちまだ15だから結婚できないし」

「なら先に式だけでも挙げよう！」

携帯を取り出し何処かへ電話を掛けようとした時に、真希が携帯
を奪う。

「だから、式も挙げないし、今後もそんな予定はない！」

「もう〜ツンデレなんだから」

真希の事をツンツンつついている。

「いつデレた！」

「そんなに恥ずかしくないでいいのに」

「こんなやり取りを俺はずっとにこやかに眺めていた。そして、申
し訳なさそうに話し掛ける。

「あの〜いつその会話終わるんですか？」

「元はと言えばアンタが全部悪いんだから！」

「えっ！？ 俺がいつ何をした！？」

「いいから、アンタのせいなの！」

「はいはい、そういう事でいいですよ」

呆れ気味に嘆息する。

（まったく持って意味のわからない理不尽な事で責められたのか。
はぁー）

「それよりもう寝たいんですけど」

「もうそんな時間？ んじゃあ寝ますか」

「で、俺は何処で寝ればいいでしょうか？」

「外とお風呂とトイレの何処がいい？」

「まさかのその三択！？　せめて普通の部屋で寝させて貰えませんか？」

「うん、同じ階で寝たら忍び込んで来そうだし・・・」

「するか！」

とりあえず、全力で否定する。てか、真希の中では俺は、そういう認識なんですか。

「じゃあ、此処で寝る？　そのソファ、ベットにもなるから」

「まあそういうことならいいよ」

「じゃあ私たちは上で寝るから。おやすみ」

真希が部屋から出て行く。

「おやすみなさい」

真央ちゃんも続いて出て行く。

「おやすみ」

最後に俺が答える。

そして今日という一日が終わろうとする。

今日は今までの人生の中で一番楽しい日だったな。振り返り評する。

でもこの程度で満足していちゃ駄目なんだろうな。

学校に行けるようになればもっと楽しいはずだ。そのためにも明日は頑張らないとな。

明日のためにも早く寝るか。うん、寝よ。

そして、夜の静寂を感じながら眠りの世界へと赴く。
？

第2 - 1章

第2章 学校へ行こう！

「がはっ！」

え、何！？ この痛みは？ 敵襲？ 敵襲か！

「敵襲だ！」

勢いよく体を起こす。

「いきなり何！？」

「え？」

情けない声を漏らす。

「いや、だつて俺の腹に打撃を受けたような痛みが・・・」

「布団と間違えてアンタを踏んだだけだから気にしないで」

「気にするわ！ てか、まず謝ろうよ！」

「ああ、布団にね、わかつたわ。ごめん」

「俺は布団以下の扱いですか！」

「創真こそあなたの上で寝てすいませんって、布団に謝るべきですよ？」

「え？ いやなんで？ ていうかこれが正しい布団の使い方だろ」

「まあ、そういうことにしといてあげるわよ」

「ああそりゃどうも」

投槍に返す。

「今何時だよ」

「八時だけど」

「朝っぱらから、あんま騒がせないでくれ」

「最高の目覚めでしょ」

「そーですね。どーもありがとうございます！」

「そう、じゃあ毎日起こしてあげるわ」

「それだけは勘弁してください」
土下座をして頼む。

「そう、じゃあ止めてあげるわよ」
なんか、物凄く残念そうに見えた。

「まあ、それはそうとして、もうそろそろ行くから準備しなさい。
真央がもうそろそろでご飯できるって言ってたから」

「へーい。じゃあ着替えるか・・・あ！」
「どうしたの？」

「昨日の俺の服洗濯した？」
「うん」

「俺、服あれしかないんですけど・・・」
「ドンマイ」

笑いながら答える。

「俺はなにを着ればいいのでしょうか？」
「私の制服着る？」

「それは旗からみたらただの変人だろ」
「確かに変人だけど・・・なら、ジャージにする？」

「そこは否定してくれないんですか。」
「それなら・・・いいか」

「じゃあ取ってくるから待ってね」
「おう」

少し経って戻ってきた。
「はいこれ」

手渡せたのは、赤色のジャージで肩から腕にかけて白い線が二本入っている。ズボンも側面に二本線が入っている。

「まあしょうがないか」
「渋々着替える事にする。」

「私はご飯食べて待ってるから」
「おう、すぐ行くから」

(ハラもへってるし、すぐ着替えっか)

「おまたせ」

「真央これ美味しいね」

厚焼き玉子を指す。

「そうでしょ、今日のはかなり上手くできたから」

「流石真央ね」

「ふっふーん」

胸を張って誇る。

(あれ、聞こえてなかったのかなもう一度)

「おまたせ」

「ご馳走様、美味しかったよ、真央」

「どうも、ありがとう」

笑顔で答える。

「ねー無視しないでって！ 泣くよ俺、このまま無視し続けるとマジで泣くよー！」

二人に尋ねる。

「はいはい、わかったから、泣かないで」

「お兄い結構可愛いですね」

真央ちゃんの言葉に赤面する。

「いただきます」

恥ずかしいので誤魔化すために「ご飯を食べ始める。

今日の朝食は「飯、焼き魚、厚焼き玉子と和風で揃えられていた。

「お、マジで美味っ」

「そうでしょ」

だから何で真希が威張る。

「お兄いよく似合ってるよ」

(俺が真希のジャージ着てることを絶対おちよくってるだろ)
「褒められてもあんま嬉しくないんだが」

「いいから、早く食べちゃいなさい」

真希が急かす。

「別にそんなに急がなくてもいいんじゃない」

「アンタが試験で苦しむ姿が早く見たいのよ」

「なにその黒い発言わ!」

「だって面白そうなんだもの」

「面白くも何とも無いと思うんですけど・・・」

「それは見てからの楽しみ。だから早く食べなさい」

「はいはい」

(折角の美味しい飯なのに、なんでこんな急かされなくちゃならんのか・・・)

「ご馳走様」

(あーもう食べ終わったよ)

食器を流し台へと運ぶ。

「よし、じゃあ行くよ」

無理矢理手を引っ張って玄関へと連れ去る。

「いや、ちよま、まだ歯も磨いていないんですけど!」

叫ぶが普通に無視される。

「はい! 靴履く! よしじゃあ行くよ」

「あゝもう、はいはい」

勢いに押され靴を履く。

「いっていきまーす!」

「いってきます」

元気な声と疲れた声が木魂する。

「同伴出勤いつてらしゃーい」

元気な声の家から響く。

「違っわ!」

「もう、恒例だな」

「何か言った?」

鋭い眼光が向けられる。

「いえ、何も」
「んじゃ、行こー」
「ちよ、走んなくてもいいんじゃ？」
「なんか、気分的に」
「はあー」
ため息を吐きながら振り回される。そして、十五分程走らされた。

「ここのよ」
「やっとなつたか。て、おーすげえ」
御友高校 クラシックな外観で雰囲気のある造りである。
「とりあえず、事務室に行きましょう。こつちよ」
向かう方向を指差し、促す。

「ん、ああ」
校舎に見とれて止まっていた脚を動かし、真希に付いて行く。
正門から右手にある来客兼職員用の玄関前へと着く。

「必要書類とか用意してあるのか？」
「それなら、昨日のうちに恵理奈さんが送つといてくれたみたいよ」
「流石恵理奈さん、手際がいいな」
「いいから行くわよ」
入り口のスロープを登り玄関の中へと入る。

床には黒いタイルが敷き詰められ、壁や天井は清潔感にあふれた
純白である。

外装も然ることながら、内装もデザインに凝られていた。
「すいませーん」
事務の職員の人を感じよく返事を返す。

「何の御用でしょうか？」
「こいつが今日編入試験受けるんですけど」
と、俺の事を指差す。

「では、受験される方のお名前の確認をよろしいでしょうか？」

受付の女性が俺に尋ねられた。

若干なんでその服着てんの？ という目線を感じたが気にしない。

「平井創真です」

手元にある書類（？）を確認しながら。

「はい、承っております。ではこちらに」

女性が事務室から出て案内を始める。

「じゃ、いこう」

「おう！」

だが、此処で立ち止まる。

「どうしたの、創真？」

「土足でいいのか？」

「いいのよ、うちの学校は、早く行く」

「あ、うん」

短いやり取りをし、受付の女性に付いて行く。

廊下を突き当たりまで歩き、左に曲がった正面にある部屋へと案内された。扉の上にあるプレートには小会議室と記されていた。

「ここで筆記試験を行います。カンニング防止のため携帯電話などは、私か彼女に預けて下さい」

「あ、俺携帯持ってないんで大丈夫です」

「そうですか、では軽く筆記試験の内容について確認しますね。教科は英語、国語、数学の三教科。それぞれ時間は六十分間です。わかりましたか？」

「あ、はい！ あの時間が余ったら次の教科を始めてもいいですか？ 後、全て解き終わった時に試験終了にして貰いたいんですけど・・・」

「三教科それぞれ間に休憩無しになりますが、それでも構わないのなら可能ですよ」

「それをお願いします」

「はい、わかりました。それでは、試験用紙を持ってきます。筆記

用具は持参されましたか？」

「あ、忘れました」

正確には準備する時間もなく、無理矢理連れ出されたんだが。

「では、こちらで用意しますので少々お待ち下さい」

そして、先ほどの道のりを戻る。

「そうだ、創真一つ良い事教えてあげる」

「何だ？」

「この学校は成績優良者には、補助金だかなんだか忘れたけど、まあ何かしら良い待遇があるから頑張りなさい」

「そういう事はもっと早く言おうよ！ それ知ってたら少しは勉強したのにさ」

「だって、今思い出したんだもん。それに、勉強しても意味無いって言ってたのは誰だっけ？」

「さ、さあ、誰だろうね」

「自業自得ってやつなんだから、頑張んなさい」

「・・・ああ」

俺のテンションが下がってきた所に受付の女性が戻ってきた。

「では、試験を開始しますので、受験者の方は中に入って下さい」

「あ、はい」

受付の女性に付いて中に入る。

「では、そのせきに着いて下さい」

「はい」

小会議室という事だけはあつて勉強机ではない机が円形に並んでいる。

「私はこの試験の監督をしますので、不備等があったら言って下さい」

「はい」

「では、180分三教科連続の試験開始」

80分後

「すみません、終わりました」

「早いですね、もういいのですか？」

「大丈夫です」

「それでは、終了します。外で待っていてください」

「はい」

そして、外に出る。

「お待たせ」

真希がいつ持つてきていたのか分からない本を読んでいた。

「思ってたよりは早いじゃない」

「案外簡単だったからな」

「ふ〜ん。そういえば何であんな注文したわけ？」

「あんまり真希のこと待たせたくなかつたからな。それでだ」

「あつそう」

会議室の中から受付の女性が出てくる。

「別の者が次の試験場へと案内しますのでお待ち下さい」

「え？ あ、はい」

(これで終わりじゃないのか?)

「真希、これで終わりじゃないのか？」

「このあとは、スキルチェック能力検査があるのよ」

「何をするんだ？」

「その人の能力のレベルを測るのよ」

「で、どういうことをするんだ？」

「それは人によって違うからわからないわ」

「そうなんだ」

「あ、丁度誰か来たじゃん」

廊下の奥の扉が開けられ、一人のシルエットが見える。

「あれ、どっかで見えたことがあるよーな」

真希が目を細めて見ている。

「はろー真希ちゃん」

「あ、華菜娃さん」

「誰？」

耳打ちで真希に尋ねる。

「恵理奈さんの知り合いで、能力の研究が専門の人よ」

「なーに、ヒソヒソ話してるのかな？」

華菜娃さんが茶化すように訊く。

「今、華菜娃さんの事紹介してたんです」

「あ、どうも、初めまして」

頭を軽く下げる。

「えーと、平井創真君だっけ」

「はい、そうです」

華菜娃さん 見た目は30歳前後の短髪でスラーっとした長身の綺麗な人だ。

「君は何でウチのジャージを着ているのかな？」

（ごもつともな反応だとおもいます。俺も同じ立場だったら絶対に訊いている）

「学校に行くからその学校の服装の方がいいと思ったんで」

（これで誤魔化せりゃいいんだけど、何で誤魔化すかって言われたら本当のことを言った方が何で？ て訊かれそうだからな）

「そーなの？ 私服でもよかったのよ」

「そうですか」

「そーです。あつ、次の能力検査を担当するのが私、鏡^{かがみ} 華菜娃^{かなえ}です。よろしく」

爽やかな笑顔で手を差し伸ばしてくる。

「よろしくお願いします」

差し出された手を握り、握手をする。

「ところで何でここに居るんですか」

真希が華菜娃さんに疑問を投げかける。

「能力者の割合ってがくせーが約八割じゃない。それに高校生はそ

の中の約四割を占めているから、能力の調査するにはちょーどいいのよ」

「そうなんですか」

「納得してくれた？ それじゃー、案内するから付いて来て」

踵を返し、白衣を翻し、先程入って来た扉から外へ出る。

渡り廊下を歩き続け一つの建物の前で脚を止める。

「ここが今回、能力検査を行う実演小屋だから」セレクトキャビン

「結構大きいし、綺麗ですね」

建物の回りには良く手入れの行き届いた草木が茂っており、実演

小屋の外壁には蔦の植物が張り付いており、緑の壁が弧を描いて広がっている。

「鑑賞し終わった？ じゃー、中に行くよ」

木製の扉を開け中へと入る。

「うお、中也凄い」

思わず声を漏らしてしまった。

中には木目を基調としたモダンな造りになっている。目の前の廊下の両側には向かい合う様に幾つか扉が付いている。

その廊下を渡り辿りついた部屋の中央には螺旋階段が上下に伸びており、それを中心に円形になっている。

今来た廊下とは反対側の方には大きな窓が取り付けられ、太陽の光が降り注いでくる。

窓側の方にはテーブルとイスのセットが幾つか設けられ、壁沿いにはベンチが設けられている。

「ここは、生徒たちの憩いの場として結構使われているの。昼食時には大繁盛しているのよ」

「確かにそうでしょうね。こんなに良い場所ですし」

「でー、平井君。君の能力はなんだい？」

「えっ、え」と

(どうしよう、能力何にしよう。あーもう、何でもいいから適当に言うか！)

「・・・目。目の能力です」

(これで、だいじょうぶか?)

「目の能力って事は視力か動体視力の強化又は、透視のどれだい?」

(おお! よかった大丈夫みたいだ)

「視力と動体視力どっちも大丈夫ですよ」

「おー、凄いね。じゃー下だ。付いて来て」

螺旋階段を降り地下2階へと来た。

造りは螺旋階段を中心にして四方に廊下が伸びそれぞれの廊下の右側だけに扉が付いている。

地下も上の階と同じ造りで円形になっていた。

「平井君の能力を検査する部屋はこっちね」

付いていき部屋の中へと入る。

「私も入っていいんですか?」

真希が訊く。

「邪魔さえしなければいいよー」

軽く答える。

「じゃあ失礼しまーす」

真希も中に入る。

「じゃあ。平井君そこに立ってくれ」

テープで目印が張ってあるのでその前に立つ。その間に華菜娃さんが何か良く分からない機械の横の椅子に着く。

「じゃー、先に動体視力の検査を始めるから、前を見て」

前って壁しかって思い見ると、壁ではない別のものが広がっていた。

「ここって地下なんじゃ・・・」

目の前に広がっていたのは、広い空間だった。少なくとも見ての奥行きは1km以上あった。

「これってどういう仕組みなんですか? どう見てもおかしいでし

よ

「ってことはこれを初めて見たのか、これは空間調節ディメンションコントロールって言って、

空間の奥行きをある程度変えられるわけ」

「へえ、凄いですね」

「んじゃー、軽く説明するよ。あそこにピッチングマシンがあるのが見えるね」

空間調節の中にあるピッチングマシンを指差す。

「あそこから野球ボールを飛ばすからそこに書かれた数字を当ててね」

手元にある野球ボールに数字を書き横の機械に入れる。

「さつきから気になっていたんですけど、その機械は何なんですか箱型の機械にアンテナのような物が一本伸びていた。」

「これは、パライクルトランスフター流化転送機パーって言って空間調節の中にあるあれに送るのと、空間調節の中にある、似たような機械を指す。」

「あつちのは流化受信機パライクルレシーバーって言って流化送信機から送られた物を受信する物よ」

「でも、何であんな近くにあるのにそんなものを使うんですか」

「あの中って完璧に安定した空間じゃないから、人が入るには危ないからこうゆー機械を使うってわけ」

「そうなんですか」

「でー、ついでにあそこに見えるもう一つの機械は捕球くん、送ったボールをピッチングマシンに入れてくれるの」

「いつの間にかに送られていた野球ボールを捕球くんが忙しなくピッチングマシンに入れていた。」

「じゃー、始めるけどいい？ 三桁の数字が書かれたボールを五つ飛ばすから」

「はい、わかりました」

「んじゃあ、3・2・1・スタート！」

ピッチングマシンから物凄い勢いでボールが五連続で飛び出した。

「早ー！」

真希が声を漏らす。

「351、946、476、204、637」

「え、見えたの!？」

真希が驚く。

「はい、全部正解。時速300?だからレベル7だね。もうちょい速さ上げるね」

「はい」

「私、全然ボールを追うので精一杯だったんだけど」

華菜娃さんがボールにまた数字を書き流化転送機に入れる。

「んじゃあ、始めるよ。3・2・1・スタート」

先程よりもさらに早いボールが連続で飛ばされた。

「915、740、335、692、294」

「・・・正解。時速500?だからレベル10ね。凄くない!」

「そりゃどうも」

頭に手をのせ軽く頭を下げる。

「あめでとう、創真凄いじゃん」

と、肩を軽く殴る。

「サンキュ」

「この学校初のレベル10ね。今まではレベル8までしかこの学校にはいなかったのよ」

「え、でも真希って」

いきなり真希に連れ出される。

「創真、私がレベル9ってことは皆には内緒にしてるの」

小声で話す。

「でもなんで？」

「何かと面倒なのよ、学校で一番レベルが高いとすると色々な仕事とか回されるから、嫌なのよ」

「へへ、そういうもんなんだ」

お互いに小声で会話を続けた。

「なぐに、二人でいちゃついているのかな？」

華菜娃さんが近づいて来る。

「いや、なんでもないです！」

真希が慌てて返す。

「そう、じゃー次は視力の方を測るね」

言い放ち、キーボードを操作して、空間調節の操作をする。

「とりあえず最初はレベル5の5？からね」

「はい」

「今私が打った言葉がむこーにあるモニターに表示されるから、それを読み上げてね」

「わかりました」

俺は右手で右目を押さえる。

「それでいーの？」

「あ、はい視力はどっちも同じなんで」

「じゃー、はい、どーぞ」

言い切ると同時に打ち終える。

「……」

「どーかしたの？」

華菜娃さんが首をかしげる。

「あれを読みますか」

左手で指を指しながら訊く。

「そーよ、指示どーりにね。じゃないとカウントしないから」

「……はい」

一呼吸置く。

「俺に構わず先に行け！」

「……。どうしたの創真。元から壊れてたけど、余計壊れた？」

冷たい視線が注がれる。

「いや、あそこに『俺に構わず先に行け！（感情を込めて）』って書いてあるんだよ！」

必死に弁解する。

「せいーい」

暢気な声を出す。

「華菜絵さん、なんで、こんなの出すんですか!?!」
声を荒げて訊く。

「私が少年漫画が好きだから。それに、なーんか、かっこいいって
思ったからよ」

笑顔で答える。

「いまだき、そこまでベタな漫画ってあるんですか?」

呆れながらも訊いてみる。

「それが、たま〜にあるのよ」

「すなんですか」

「それじゃー今度は距離倍にして10?ね。今度はレベル10だから。
ら。ついでにこれが空間調節でできる最大距離ね」

「あーまたさつきみたいなのを出すんですか?」

「そのつもりよ」

うわ〜めっちゃ笑顔だ。

「できれば止めてもらいたいんですけど・・・」

「じゃー考えといてあげる」

考えといてあげるって絶対変える気ないな・・・。

「・・・はい」

「それじゃーどーぞー」

話終わると同時に、キーボードを打ち終える。

「ここは俺が食い止める!」

「・・・」

「真希! 無言は止めて! それに華菜絵さん! やっぱり変えて
くれませんでしたね!」

「おー凄いじゃないか。正解だ。視力の方もレベル10だ」

「無視ですか! 俺の事無視で話進めますか!」

「両方レベル10なわけだし、あの距離でボール飛ばしてみよーか」

(これはいくら言っても聞いてくれないな)

「・・・はい」

諦めて指示道理にすることにする。

「始めるから準備しといてくれ」

ボールに数字を書き、流化送信機にボールを入れる。

「・・・はい」

「準備できた？ それじゃー3・2・1・スタート」

10？先のピッチングマシンから野球ボールが連続で飛ばされる。

「628、063、118、725、830」

「・・・正解！ おめでとー。速遠兼眼レベル10よー」
ファールピッター

「とりあえず、おめでと」

ずつと黙っていた真希がやっと口を開く。

「ありがとう」

二人に礼をする。

「この結果なら筆記試験が、れー点でも、たぶん受かるよ」

「おー、本当ですか！ よかったあ」

安心して力が抜ける。

「じゃーこれを持って事務室に行ってくれ」

能力試験結果と書かれた用紙を俺に渡す。

「こういうのって普通監督者が持つて行くんじゃ・・・」

「いーのよ、どーせ結果は変わらないんだから」

「そんなんでいいんですか？」

「いーのよ、じゃー早く持つて行きなさい」

意地でも持つていく気はないみたいだ。

「じゃ、行こう創真」

「あ、うん」

真希に促され、行く事にした。

扉を開け、螺旋階段を上り外へと出る。

「さっさとこれ渡すか」

「そうね、早く行きましょ」

渡り廊下を渡り、事務室前へと着く。

「すいませーんこれ持つてきました」

事務室の中に告げる。

「え〜と、平井創真さんですね。では能力試験結果の用紙を受け取ります」

事務の人に用紙を渡す。

「これが筆記試験の結果です」

事務の人から用紙を渡される。

「早く見して」

真希が急かす。

「よし！」

緊張の一瞬。二つ折りにされている用紙を開く。

「えっ・・・」

真希が驚く。

「全部満点ってアンタどんな頭してんのよ！」

「保障があるって言うから本気で解いたこうなったみたいだな」

空笑いしながら答える。

「へーそうなんだ」

感情のない声が返る。

「平井創真さん合否結果ができました。合格です。おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「こちらに、編入手続きに必要な書類が入っていますので、指定された日までに提出して下さい」

一つの封筒を渡される。

「ありがとうございます」

軽く頭を下げ、そして振り返って真希に話しかける。

「さ、帰ろう」

「そーね、優秀な創真さん」

「何ですかその初めて聞く口調は？」

「いえ、なんでも、じゃあ帰りましょうか」

玄関を出てから真希が携帯電話を取り出し時間を確認し、口を開

く。

「丁度昼時だしどこかで食べてく?」

「いいけど、俺一文無しだよ」

「いいわよ、そんならい奢ってあげるから」

「マジか! サンキユ!」

「ま、合格祝いつてことで。少し歩くけどいいでしょ?」

「ただ飯食えるなら何処までも着いて行きます!」

「じゃあ、私はタクシーで行くからアンタは走ってきなさい」

「それは勘弁!」

「まあ、冗談だけど」

「真希、腹減ったし早く行こう」

「そうね」

真希に付いて何処かへと向かう。

第2 - 2章

学校から暫く歩いて駅前へと着いた。

「ここでいい？」

大型ハンバーガーチェーン店を指差す。

「いいけど混んでるな」

昼を少し過ぎたとはいえ、人気があるようで未だそれなりに並んでいた。

「十分も並ばないと思うし行こう」

そして、列の最後尾に並ぶ。

「俺、こういう所初めて来たよ」

「へーそうなんだ。結構美味しいよ」

「んまあ楽しみにしとくよ。それはそうとさ真希？」

「何よ」

「この格好目立たないか？」

そういえば創真は真希のジャージを着ているのであった。

「一応私も制服で着てるから大丈夫でしょ」

「ん、ならいいけど」

待つこと数分。

「次の方どうぞ」

レジの女性が案内する。

「あ、私たちね」

レジの前へと立つとレジの方が「ご注文をどうぞ」と言う。

「えーと、チーズバーガーセットで、創真アンタは？」

創真へと視線をやと、珍しいものを見るかのようにメニューを凝視していた。

「創真」

「・・・」

呼びかけたが無反応なのでもう一度。

「創真」

「・・・」

まだ、メニューに夢中になっている。

「後もう一つチーズバーガーセット下さい」

レジに告げる。

「では、こちら側に並んでお待ち下さい」

「はい」

真希が移動する。

「創真、こつち」

まだ見ていたので無理矢理引き寄せる。

「ただだけメニュー見てんの！」

「いや、だって沢山種類があるんだもん！ 凄くない！」

何故かやたらとテンションが高い。

「いいから落ち着きなさい」

「じゅーぶん落ち着いてるって！」

（それで落ちついていているつもりなんだ。なんか変なスイッチ入っ

たみたいね）

「あ、きた」

トレーに乗せられたチーズバーガーセット×2を受け取る。

「ほら、いくよ」

「お、おうー！」

「じゃ席探そう」

「おうー！」

（あーなんか疲れる。）

「どこか空いてない？」

「見つからないけど」

「レベル10でしょ見つけなさいよ」

「これは能力関係ないって！」

「使えないわね」

「どーもすいませんね」

(ようやく元に戻ってきたか。なんでメニュー一つでテンション上がるんだか)

「あそこ空いてるから行くよ」

「おう」

真希の後に続いて創真が席に着く。

「じゃ、食べましょう」

「そうしよう」

創真がチーズバーガーを口にする。

「うわ！ 美味！ これ」

「そんなに美味しいかな」

真希が空笑いしながらチーズバーガーを口にする。

「美味いって！」

「美味しいと言えば美味しいけど、そこまでじゃないと思うよ」

そして、もうチーズバーガーを食べきった。

「アンタ、食べるの早いわね」

「美味かったからな、これはどん何なんだ」

次はポテトを口にする。

「おお！ これも美味い」

「いいから落ち着いて食べなさい」

(なんか、私が保護者みたいね)

「ボク、もう少し落ち着いて食べましょうね」

「誰がボクだ！ それになんですか、その妙なキャラわ！」

「いつも通りよ、ボク」

にこやかに小首を傾げる。

「お願いしますそのキャラ止めて下さい」

「飽きたらね」

「・・・はい」

諦めたように、創真がドリンクを飲む。

「うわぁ！」

「今度は何かな？」

「今これ、シユワってした。これ何」

眼を見開いて驚き、真希に訊く。

「何ってただのコーラよ。そのシユワってやつは炭酸ね」

「へえそうなんだ」

「まあ、おいしいでしょ？」

「うん。俺これ苦手だわ」

「人が折角買ってあげたのに嫌いってのわ、ないんじゃないかな。
ボク」

「あの、真希さん」

「何かな」

「表情と目が一致していない様に見えるんですけど・・・」
笑ってはいたが目が怖かった。

「それに、苦手なだけで嫌いとは言ってはいません」

「そう、ならちゃんと飲みきりなさいよ」

「はい！」

そして、一気に飲み干した。

「ど、どうだ。飲み切ったぞ。ゲップ」

「どうだって、そんな意気込むような事じゃないでしょ」

「そうですか。うえーなんか変な気分」

「私ももうそろそろ食べ終わるから待ってなさい」

「へーい」

そして、真希が食べ終わり、トレーを返して店を出る。

「んじゃあ、恵理奈さんの所に行きましょう」

「ああ、行くうか」

店をでて、恵理奈さんのところへと向かうのであった。

「やっと着いたわね」

「ああ、やっと着いたよ」

疲れきった声で返す。

「なんかやけに疲れていない？」

「誰のせいだと思っっているんですか！」

「誰のせいなの？」

全く見当が付かないと首を傾げている。

「真希のせいでしょうが」

また疲れきった声で答える。

「何かあったかしら」

どうやら本当にわかっていないようだった。

「帰る途中、真希が目につく店に行きまくるから、それに振り回されて疲れきったんですけど・・・」

「そんなに寄っていないって」

「これでも？」

手に持っている物を前に差し出す。

「ホント、荷物持ちがいて助かったよ」

悪びれたところが一切なかった。

「あゝもういいです。何言っても無駄だって言うことがわかりました。てか、よくこんなにお金持っていたな」

買い物では2〜3万円位使っていた。高校生では大金だろう。

「まあ、結構お金はあるのよね。んじゃあ早く中に行こう」

「そーですね」

感情無く答える。

扉を開け中へと入る。

「ただいまー」

ただいまなんだ、んじゃ俺も。

「・・・ただいま」

様子を伺うように控えめに声を出す。

「おかえりなさいです！」

流深ちゃんが右手を大きく上げて返事を返してきた。

「帰ったか」

恵理奈さんが無愛想に返事をする。

「創真さん合格おめでとうです！」

「え、なんでもう知ってるの!？」

創真が驚いていた。

「先程学校の方から連絡を貰ったんだ」

「そうだったんですか」

恵理奈さんの説明に納得した創真であった。

「そこで、創真さんにお祝いです！」

「え、マジで！」

「はい、マジですよ！」

辺りに目をやると手に持っているものと似たような紙袋が置いてあった。

「中、見てもいいですか？」

恵理奈さんに確認をする。

「構わん」

相変わらず恵理奈さんって口数少ないよなあ。んまあこんな事はどうでもいいから中身を確認して見ようか。

「おーありがとうございます」

「なに、私にも見して」

真希が無理矢理に覗き込んでくる。

「ちよま、俺もまだちゃんと見てないのに」

さつきまで目の前にあつた紙袋が真希の下にあつた。

「なんだ、ただの服か。もっと面白い物がよかつたのに。・・・

燃やすか」

「それは止めて！ 真希が喜ぶような面白い物が入っていたら、絶対俺が困るわ！ それに自分はあるなりに服買つといて他人の物になると一気に興味ゼロですか」

「他人の物だからじゃなくて創真の物だからよ」

「あーそうですか俺の物だからですか・・・」

「まあいいから早く着替えなさい」

俺の事を指差して命令をする。

(結局興味はあるみたいだな。えーと着替えられそうな場所はと・
・あつた)

「保険室(？)借りますね」

「はい、いつてらっしやいー」

真希が手を振って見送る。

数分後、創真が戻って来る。

「桜空創真のファッションショー」

馬鹿が一人入室しました。

創真の言葉に続いて真希も一言。

「どうもありがとうございましたー桜空創真でしたー」

馬鹿が排除されました。

「もうちよい相手してよー」

「えー面倒臭い」

「というか俺がこんないいもの貰っちゃっていいんですか？」

「気にするな」

「セールで格安だったです！」

「そうだったんですか」

(できれば聞きたくなかったな)

「よかったじゃない、これで私のジャージ着ないで済みそうね」

「まあそれは助かるけど」

「それで今日は合格祝いでパーティーをしますよ！パーティーですよ！パーティー！」

流深ちゃんがはしゃぐ。

「そつだ、真希」

「なんですか？」

「真央も呼んでおけ」

「はい」

携帯電話を取り出し、電話を掛ける。

「そついえば、なんで恵理奈さんは真希とかとあんなに仲いいんで

すか？」

「真希と真央の両親と私は仲がよくてな、二人が最先端区域行く際に預かったんだ。流深も同じような感じだ」

「そうだったんですか」

「思ってたよりも面倒見いい人なんだな。」

「連絡完了！」

「真希が戻ってきた。」

「真央が直ぐいきますだって」

「そうか、何か食いたいものはあるか？」

「えっ！ 恵理奈さん久しぶりにご飯作ってくれるんですか？」
表情を一気に輝かせる。

「そこにあるチラシから好きなものを選んでおけ」

「なんだ、違うんだ」

唇を尖らせて小声で嘆息した。

「はい！ 選ぶです！」

流深ちゃんが嬉しそうにチラシに飛びつく。

「創真さんは何か食べたいものはありますか？」

「うんそうだな。俺は」

「ボクはピザがいいです！ 後、チキンも食べたいです！ それにお寿司とカレーと中華とそれとそれと、もうとにかくいっぱい食べたいです！」

「そうなんだ、でもそんなにいっぱい食べきれないんじゃない？」

「そうなんです。それが悲しいです！」

その言い方だと全く悲しそうには見えないけれど、まあ気にしないでおこう。

「あー私はなにか美味しいものね。美味しいもの以外認めないから！」

気を取り直した真希が言い放つ。

「それに載っているものは殆ど美味しいものだと思うけど」

チラシに視線をやりつつ告げる。

「そうじゃなくて、私をわつと驚かせてくれるようなものが食べてたいのよ。もちろん美味しくてね」

「そんな抽象的なものじゃなくて、もっと具体的なもの言えよ」

「そうね、見た目のギャップていうのが大事だと思っつ」

（あーもう俺の話を中途半端にししか聞いていな）

「見た目が、何これ食べ物？ って状態なのに食うと美味いみたいなものか？」

「そんな定番のじゃないのよ。なんて言えばいいんだろう、えーと、んまあギャップが大事なの！」

浮かばないから適当にはぐらかしやがった。

「んじゃあ・・・ どうみてもピザなのに、食ってみたらクレープの味がするとかか？」

「そんな感じなんじゃない」

（なんか妙に反応が薄いつてか、俺の言葉が右から左にスルーして行っつたな。もう興味なくなったのかい、折角考えたというのに）

「そういうアンタはなにが食べたいの？」

勢い良く質問された。

「俺はなんでもいいよ」

「なんでもいいのね、わかつた」

（あつ、やべ、これは絶対にろくでもないことを考えている。急いで付け足さんと！）

「ただし、健康がいなく普通に市販されているものな！」

「ちつ、そんなのわかつているから」

（舌打ちしたつてことは本当にとんでもないものを食わせる気だつたのか。危なかつたわ。公園の草とか食べさせられたいたかもしれないな）

「ちなみに、俺になに食わせようとしてた？」

恐る恐る訊いてみる。そして、笑顔で返答。

「レンガとか塩酸とかオリハルコンとかよ」

想像以上だつた。公園の草とかはまだ可愛い方だつたんだな。

「そんなもん食わせる気だったのかよ！ てか、レンガと塩酸はよくはないけど、まだいいとしてオリハルコンはここにあるのか？ ならば是非見せて下さいよ幻の金属を！」

「あるわけないじゃない、それにオリハルコンは冗談よ」

「それ以外は本気と」

「信じるか信じないかはアンタ次第！」

言って俺を指差し、何かに気づく。

「そんなの買った服の中にあつたかしら」

俺の首元を指していた。

「これか？ 入っていなかったよ元々俺のだ」

リングにチェーンを通したネックレスを見せる。

「誰かからの贈り物？」

「いや違うんだ。これは母さんの形見らしいんだ」

「そうなんだ」

「あ、別に形見だからって、母さんが亡くなつてるとは限らんから。生きているのかどうか、顔も知らないんだよな」

声からも表情からも淋しさが感じられた。

「でも、俺はいずれ会えるってしんじているから。信じるものは救われるっていうしな」

今度は声も表情も明るかった。

「そうね、私もアンタがお母さんに会える事を信じるよ」

「ただいまー」

真央が入ってきた。

「おかえりです！ 真央ちゃん！」

「流深ちゃん」

真央ちゃんと流深ちゃんが抱き合った。

「二人は仲がいいんだね」

「仲良しです！」

「そつえば何をしていたんですか？」

真央が回りに訊く。

「今何を頼むのか決めていたところよ」

真希が答える。

「それで何にしたの？」

「それが、まだ決まっていないのよねえ。真央はなに食べたい？」

「私はなんでもいいよ」

「そう、じゃあ私が適当に決めちゃっていいかしら？」

俺の時とは違って、変な物は食わせる気はないんですか。

「お姉えに任せる」「はいです！」「別にいいよ」

真央ちゃん、流深ちゃん、創真が答える。

(恵理奈さんは返事が無かったが、あの人は何でもよさそうだしな)

「んじゃあ、頼んでくるねー」

また携帯を掛け始める。

「そういえばそれは何が入っているの？」

真央ちゃんが持っている袋について訊く。

「この中にはクラツカーと飲み物が入っています」

「何でクラツカーなんか買ったの？」

「お姉えに頼まれて買ったんですよ。パーティーするからクラツカ

ーも買ってきてねって、言われて」

「真希らしいな」

空笑いしながら答える。

「それはそうとこんな所でクラツカーなんか使って散らかしちゃっていいのか」

創真が回りの人に訊く。

「向こうにパーティールームがあります！」

モニターが沢山ある方向と逆側にある扉を指す。

「正確には使っていない地下室への階段ですよ」

真央ちゃんが流深ちゃんの説明に付け足す。

「へえー地下室まであるんだ。ここって大分広いんだな」

「地下だったら幾ら騒いでも大丈夫なんですよ」

「朝まで騒ぐです！」

真央ちゃんと流深ちゃんが楽しそうに話す。

「朝までつて子供は早く寝ないと駄目だよ」

二人に注意してみる。

「子供扱いしないで下さい」

「ボクはもう立派な大人ですよ！」

真央ちゃんと流深ちゃんが頬を膨らませて怒ってくる。

「はいはい、ごめんね」

こんなことで怒るなんてまだまだ子供だなつと微笑ましく思う。

「おつまたっせ」

注文し終えた真希が戻ってきた。

「何を頼んだんだ？」

「フライドチキンのパーティーバーレルとピザを二枚頼んどいたわ。

こんだけ頼んでおけば5人でも足りるでしょ」

「わーい、ピザとチキンです！」

流深ちゃんが手を上げてが喜ぶ。

「来るまで時間あるけどその間にする」

創真が皆に尋ねる。

「そうね、じゃあ皆で仮想戦闘機でタッグ戦でもやる？」

「嫌だわ！」

「私も遠慮します」

創真と真央ちゃんが反対した。

「何で嫌なのよ！ 来る前に腹ごなししましょうよ」

不満を漏らす。

「そりゃそうだろ！ あんなもんもう食らいたかないわ！」

真希と戦った時に最後受けた攻撃を思い出しながら言う。

「私は皆みたいレベルが高くないからいいです」

「真央、そんなこと気にしなくていいからやろつよ」

「いいつて、だって皆レベルが高すぎるんだもん。お姉えはレベル

9、お兄いはレベル10つて聞いたし、流深ちゃんはレベル7、私はレベル3だし差がありすぎるんだもん」

「そうだったわね、忘れてたわ」

「なら、お姉えと流深ちゃんて戦えば？」

「それはいい」

真希がすぐ断った。

「あまり流深とは戦いたくない」

(戦いが好きそうな真希が拒否するとは、流深ちゃんも相当強いみたいだな)

「じゃあ、仮想戦闘機は無しって事で何やる？」

また創真が皆に訊く。

「なら、億万長者ゲームでもやる？」

真希が提案してみた。

「え〜」「ボクは遠慮しますう」「俺もいや」

真央ちゃん、流深ちゃん、創真、皆断った。

「なんでよ」

皆に理由を訊く。

「あれは一回やれば十分だからだな」

創真が代弁して答えた。

「そう、じゃあ妥当にトランプでもやる？」

「そうするか」

創真が答える。

「大富豪やるです！」

「大富豪ならいいですよ」

今度は皆賛成した。

「それでトランプはどこにあるの？」

「今取ってくるです！」

流深ちゃんがトランプを取りに行く。

「持つてきました！」

「早！」

創真が声をあげた。

「では配るです！」

そして、カードを配り大富豪を始める。

第2 - 3章

一戦目終盤

「革命です！」

「えっ、このタイミングで」

真希だけが声を漏らした。どうやら強いカードだけを残していたみたいだな。

「そして8切りで9で上がりです！ 一番です！ 大富豪です！」

「俺の番だな。9だからダイヤの4で縛りだ」

二人ともパスをした。

「Qのスリーカードだ！ どうだ！」

また二人ともパスだった。

「なら2で上がりだ。二番目だから富豪か」

「ここで姉妹の一騎打ちになった。」

「私の番だね、お姉え」

「いいから、早く出しなさいよ」

「2だから10で縛り」

「パスよ」

「じゃあ、Kのツーペア」

「・・・パスよ」

「じゃあ、8切りで1で上がり。残念貧民だ。お姉えおめでとつ、大貧民」

「そりゃどもありがとう」

ふてぶてしく答える。

こんな感じで何度か続けた。

流深ちゃんは始めから大富豪で、真希も始めから大貧民、俺と真央ちゃんは入れ替わり立ち代りだった。

そして何度目かの対戦中にインターホンが鳴り響いた。

「あ、来た！ 大富豪は終了ね」

真希がカードを投げ捨て外へと向かう。

「あ、お姉え負けてるからズルイ」

出前が届いた事と真希が放棄した事によって大富豪は終了した。

「流深ちゃん大富豪強いね」

「はい、ボクは強いです！」

「それに比べて真希は弱かったね」

「お姉えは今回惨敗でした」

空笑いしながら真央ちゃんが答えてくれた。

「お待たせさまー」

真希が両手でピザの入った箱を重ねて二枚もち、その上にフライドチキンのバーレルを乗せて入って来た。

「ピザとフライドチキン両方売ってる出前あるんだ」

創真が疑問を唱えた。

「違うわよ、タイミングよく二つのお店の人が来ただけね」

「あーそうなんだ」

感心して答える。

よく見てみればピザとフライドチキンのパッケージが違っていた。

「それじゃ、パーティールームに行きましょう！」

真希が元気よく歩き出す。

「行くです！」「いきましよう！」

続いて流深ちゃんと真央ちゃんも歩きだす。

「あ、俺いくつて。て、お前らトランプくらい片付けろつて」

散らばっていたトランプを纏めもとの入れ物に戻し、後を追う。

「創真、ドア開けて」

追いつくやいなや命令された。

「はいはい」

真希の両手が塞がっているので仕方がなく開ける。

部屋の中にはダンボールが沢山積まれており、壁に沿った隅っこに階段があった。その階段を下りた先に広い部屋があった。

「おー結構広いんだな」

創真が率直な感想を述べた。

「はい、広いですよ！」

流深ちゃんが答える。

「いいから退いてー邪魔だから」

真希に言われて避ける。

「ふう〜重かった」

持っていた食べ物や部屋の真ん中にあるテーブルの上に置いた。

「そういえば思ったんだけどさあ」

真希が創真に疑問を投げかける。

「何だ？」

「こういう重たいものって普通、男であるアンタが持つべきなんじゃないの」

俺の事を思いつき睨んでくる。

「アハハ、何のことかしら。一体全体なんのとだが、さっぱりわからないなあ」

「あっそう、創真一回、上向いてみて」

「ん？ わかった」

言われた通りに上を向いてみる。

「特に何も無いじゃ　　うっ」

いきなり腹に鈍痛が走った。

「い、いきなりなにするんだよ」

「さあ、一体全体なんのことだか、さっぱりわからないなあ」

「そ、そうですか」

まったく同じ言葉を言われたのでこれ以上返す事ができなかった。

「全く、二人ともそんなにいちやいちやしちやって」

真央ちゃんが楽しそうにこっちを見ていた。

「だから、あーもう言いや、何度も否定するのも面倒だから
投槍に返す。」

「できれば、助けて欲しかったよ、真央ちゃん」

「嫌ですよ。そうした方が楽しそうでしたし」

屈託のない笑顔で答えられた。

「私は、恵理奈さん迎えに行つてくるわね」

「はい、行つてらっしゃい、お姉え」

「んじゃあ、その間に俺たちは、これ並べとくか」

「そうしましょうか」

真央ちゃんが頷く。

「ボクも手伝います！」

皆で手分けして紙皿や紙コップなどを並べる。

「恵理奈さん連れてきたよー」

「待っていたです！」

「丁度並べ終えたところですよ」

真希の後に流深ちゃん真央ちゃんが続いた。

「それじゃあ、始めるから皆席に着いてー」

真希が促す。そして、全員が席に着く。

机の一番奥に恵理奈さん、入り口から右側の奥から真希、隣に創

真、左側に奥から流深ちゃん、隣に真央ちゃんが座る。

「それじゃあ、創真の合格を祝してかんぱーい」

真希が紙コップを高く掲げる。

『かんぱーい』

皆も続いて紙コップを掲げる。そして、全員注がれていたオレシジユースを飲み干す。

そして、一つ驚いた事を真希に小声で訊いてみる。

「恵理奈さんってこういうのに意外と乗ってくれるんだな」

「そうよ、みんなは恵理奈さんはこういうの乗らないって思つみた
いだけど、案外そういうことはないのよ。まあ私たちと居る時だけ
だけどね」

「お前らなんか言つたか？」

恵理奈さんが半目でこつちを睨む。

「いえ、なにも」

見事に八モった。

「ボクはピザを貰うです！」

流深ちゃんが勢いよくピザに手を伸ばす。

流深ちゃんはあるで食べれるのか？ と思った。そりゃそうだろう、手の先には明らかに余っている白衣の裾があるからだ。

だが、そんな疑問はすぐさま解決された。白衣が垂れ下がったまままで器用にフォークを使ってピザを食べていた。垂れた袖を汚すことなく。

「あれ、凄いな」

真希に訊いてみる。

「あれって、なによ？」

「あれって流深ちゃんの食べ方」

「ん、あ、本当だ凄いね」

どうやら今まで気づいていなかったようだ。

「そんなこと、どうでもいいから、これを、食べなさいっ」

真希が俺の口に無理矢理フライドチキンを突っ込んできた。

「ひざがりごんなもほふっこんで、っへこへふまっ（いきなりこんなもん突っ込んでっこれ、美味っ）」

「そうでしょう」

笑顔でこつちを見てきた。

（笑顔で返した事よりさっきの言葉を理解してくれた事の方が凄いな）

「よし、なら真希も食べっ」

今度は俺が真希の口にピザを突っ込む。

「んあ、美味しいわね、流石私が注文した店だけのことはあるわ」

何故か真希が誇る。

「真希がえばるような事していないだろう」

「私のおかげでこんな美味しいもの食べれるんでしょ？」

「そーですね」

これ以上何を言っても無駄なのでここで話を切る事にした。

「お兄いジューズなくなってますよ」

言いながら真央ちゃんがジュースを注いでくれた。

「お、ありがとう。真央ちゃんは誰さんと違って気がきくよなあ」
「どういたしまして」

真央ちゃんが笑顔で返す。

「誰かさんって誰のことかしら」

その誰かさんが俺にじつとした視線を向けてくる。

「さあ誰でしょうか。本人が一番わかっていそうですけど」

「んじゃあ、思い当たる節が一切ないから私以外の誰かね」

「お前だろうが！」

「やっぱり私の事だったのね」

笑顔で怒った顔を俺に向けてくる。

「とりあえず、一発殴る！」

「や、止めるって！ そんならいの事で怒るなよ」

椅子から立ち真希が居る方と反対側に後ずさりする。そこに恵理

奈さんが一言。

「能力は使つなよ」

ピザを食べながら真希に注意する。

「恵理奈さん注意だけじゃなくて止めてくださいよ！」

「自業自得だ」

バツサリ言い捨てた。

「んじゃあ、覚悟はできたかしら？」

「いや、できないから、てか一生できないから」

そう言いながらまた後ずさりをする。

「そんなの、知らん！」

言い放ち俺に向かって走り出す。

「いや、知ってくださいよ！」

真希から逃げようとしたが脚を躓かせて転んだ。

「よし、踏み潰す」

「げはっ」

文字通り踏み潰された。

「痴話喧嘩ならよそでしてくださいねー」
真央ちゃんがこつちをニヤニヤと見ながら茶化す。
そんなこんなで一時間程経過した。
「あれーもう飲み物なくなっちゃったじゃない」
真希がペットボトルを逆さまに振りながら中を覗く。
「しょうがない私が買いに行くかぁ」
「いいよ、俺がいくからさ」
「アンタ、まだこちら辺の地理全然分からないでしょ？ そんなの
に行かせる訳にはいかないの。それに今日はアンタが主役なんだか
ら、ここにいなさい」
「わかったよ、俺はここで待つよ」
「お姉え私も行こうか？」
「いいよ、もう外くらいからさ」
「そう、わかった」
「飲み物適当でいいでしょ？」
真希が皆に訊く。
「はいです！」「いいよ」「任せる」
流深ちゃん、真央ちゃん、創真が答える。
「んじゃあ、行ってくるわね」
真希が部屋から出て行く。
「真希も気を使っつて事できるんだな」
「お姉えは結構気が利きますよ」
「ふーん、俺にはそんな仕事全然見せてくれないけれどなあ」
「まだツンツンしているだけで、いずれデレてくれますよ」
「そんな日がくるのかね」
笑いながら返す。
「もう、ご飯がほとんどないです！」
テーブルの上に乗っているものはほとんど食べ終えられていた。
「仕方がない、お菓子でも持ってきてやるっ」
恵理奈さんが椅子から立ち上がり部屋を後にする。

「わーい、ありがとうございます！」

「その代わり、明日のおやつはなしだ」

「うー でも背に腹は変えられないです！」

頬を膨らませて唸っていた。

「なら、待っている」

心なしが恵理奈さんの顔がいつもの無表情ではなく、少し微笑んでいたような気がした。そしてすぐに戻ってきた。

「ほら、お前たちの分だ」

流深ちゃんの分だけではなく、俺と真央ちゃんの分も前に置かれた。

「ありがとうございます」「ありがとうございます。」

俺と真央ちゃんがお礼を言う。

「わーい、お菓子です！」

流深ちゃんはまだもう袋を開けて食べ始めていた。続いて俺と真央ちゃんも食べ始める事にした。

そして、真希が帰って来るまで雑談をしているのであった。

「うわあ、思ってたよりも寒いわね」

買出しに行くために外に出た真希が率直な感想を漏らす。

「さすがに四月だからって夜はまだ肌寒いか。早く買って帰ればいいかあ」

誰に語るでもなくその場で一人ぼやき、歩みを進める。

五分ほど歩き最寄のコンビニへと辿りつき、中へと入る。

「さてと、何をかおうかなあ。あの二人は炭酸でも買っとけばいいと思うけど、恵理奈さんと創真のはどうするか」

とりあえず1.5リットルのコーラを持っているかの中へと入る。

「どっしりよっかなあ」

綺麗に並べられているジュースを眺めながら考えを巡らせる。

「まあ、なんでもいいか」

無難なところで1.5リットルのリンゴジュースをかごの中に入れる。

「後はお菓子を適当に買っていけばいいかな」

と、目に留まったお菓子をかごの中へと放り込む。

「よし、これで完璧っつと」

そして、レジにかごを置き、支払いを済ませコンビニを出る。

「買ったものも買ったし、寒いから早く帰りますか」

どこかいつもと違う雰囲気の夜空の下を足早に駆ける。

第3 - 1章

第3章 パーティーお開き

「お姉え帰って来るの遅いですねえ」

真希が買いたしに行ってからもう一時間は経っていただろうか。

「まだ一時間くらいだし買うものに悩んでいるんじゃない？」

創真が真央ちゃんに答える。

「お姉えならもうとつくに帰ってきていいんですよ。コンビニは歩いて五分くらいの所だし、お姉えが買い物にこんなに悩むはずがないんですよ」

心配しているせいか語尾がどんどん弱くなっていく。

「確かに悩んでいなかったな」

昼間に買い物につき合わされていたときの事を思い出していた。

買い物の仕方は目に付いた気に入ったものはすぐ買うと言う感じで全く悩むような素振りが見られなかった。

「だから心配なんです」

また言葉弱く答える。

「じゃあ俺がちょっと見てくるよ」

言い放ち部屋を後にしようとする。

「コンビニは玄関を出てずっと真っ直ぐの所にあります」

真央ちゃんが場所を告げる。

「おう、わかった。じゃあ行ってくるよ」

言いながら軽く右手を上げる。

「はい、行ってらっしゃい」

真希のことが心配なのだろうか、ずっと弱々しい話し方だった。

(まったく、真希の奴、妹にこんなに心配させやがって、姉なんからもっとしっかりしろよな全く)

心中で悪態をつきながら階段を上り、メインルームに繋がる扉を開け進み、玄関へたどり着き外に出る。

「ん？」

外に出て何かに気づいた。

「こんな時間に手紙って届くものか？」

気になったので、郵便受けに入っている封筒を取り出す。

「送り先、差出人名なし、消印もなしってことは、直接ここに入れ
たってことか」

封筒を見回しながら考える。

「流石に俺が開ける訳にも行かないし恵理奈さんに渡すか」

先程出たばかりの研究所の中に引き返す。

「恵理奈さん」

「何だ」

「郵便受けの中に怪しげな封筒が入っていたので渡しておこうと」
持っていた封筒を差し出す。

「そうか」

封筒を受け取り中身を確認する。

クシヤ、

中身を確認するや否や、恵理奈さんが封筒の中に入っていた紙を強く握っていた。

表情もいつもと変わっていた恵理奈さんに恐る恐る訊く。

「どうしたんですか？」

「真希が誘拐された」

「え？」

（え、なんで、なんかの冗談？）

予想打にしない事態に困惑して、頭の中が混乱していた。

「おい、大丈夫か！」

（恵理奈さん一体どうしたんだ？ 何に大丈夫かって訊いているん

だ？)

バシッ、

「いてっ」

「しっかり意識を保て」

いつの間にか地面にへたり込んでいた。どうやら混乱して意識が朦朧としていた所を恵理奈さんが叩いて覚醒させたようだ。

「すみません」

「いいから落ち着け。私は流深を連れて来る」

気持ちを落ち着かせるために四五度深呼吸をする。

そして、皆がパーティールームから駆けてくる。

「真希ちゃんが誘拐されたですって！」

流深ちゃんが先頭を気って走ってくる。

「ああ、本当みたいだ」

俯き籠った声で答える。

「僕が絶対に見つけるです！」

(そういえばさつき恵理奈さんは流深ちゃんを連れてくるって言ったな、という事は流深ちゃんには真希を見つけ何かしらの術があるのか)

そう思い、暗くなっていた心の中に微かな光が零れてきた気がした。

「頼むよそれでどうやって探すんだ？」

「周辺の防犯カメラにハッキングして真希ちゃんの足取りを追います！」

言い放ちすぐさまパソコンへと向かい、幾つものパソコンを操作し始める。

「だから、流深ちゃんを呼んだんですね」

道徳的なことを注意したいが今はそれど頃ではなかった。

「ああ、何処で覚えたのか知らんが、ハッキングの技術は私以上だ」

パソコンのモニターを見ながら答える。

恵理奈さんもできるんですか、そう思ったが口にはしない。

実際問題今現在ではこの方法でしか探す術がないのは事実。唯一の希望を批判し止めさせるわけにはいかない。

「後どのくらい掛かりそう？ 流深ちゃん」

「もう、防犯カメラへの浸入おわってます！ 今は真希ちゃんをさがしています！ あ、

いた！」

真希が黒いスーツだろうか？ その男に後ろから口を押さえられ身動きを取れないようにさせられていた。そして突然消えた。

「えっ！？ 消えましたよ？」

皆に訊く。

「おそらく防犯カメラには映らないよう自動車に細工をしたようだな」

「そうみたいです！ 今から防犯カメラのサーモグラフィーモードで追跡します！」

答えが帰って次の手が打たれる。

「で、今どこかわかる？」

流深ちゃんに訊く。

「残念ながらわからないです。エリア8に入った辺りからサーモグラフィーでも追跡出来なくなりました」

落ち込んでいるのか俯きがちに答える。

「エリア8っていったらここから来たの方だな、わかった、捜しに行ってくる」

「待て！」

恵理奈さんの静止にも気付かず、勢いよく研究所から飛び出る。

「行ったか」

静止仕切れなかった恵理奈さんがつぶやく。

「流深、真希の居所はわかったか？」

「いいえ、まだです。エリア8に入ってから全く足取りが掴めな

いですう」

モニターに向かったまま悔しさを滲ませる表情で答える。

「となると、あいつだけが頼みの綱という事か」

「はい、そうです！」

「見失うなよ」

「はい、わかってます！ 絶対に見失いません！」

そして、部屋にキーボードを打つ音だけが響く。

流深ちゃんは、パソコンに向かい、恵理奈さんは流深ちゃんのサポートに入る。真央ちゃんは真希の無事を必死に願う。

多数あるモニターの内の一つは自動車の通ったルートが表示されていた。

多数あるモニターの内の一つは何処かの地図を表示され赤い点が点滅していた。

月明りに照らされる夜空の元、走るシルエットが街中を駆け、公園へと抜ける。

（真希、どこだよ）

何も考えず無我夢中で走っていたらここに着いた。

走っていた理由はただ一つ真希を探していたからだ。

公園に来たのは付き合いがまだ短いながらも一番思い入れが、思い出があるからだろう。

（エリア8って言えば向こうの方向か）

北の方角を遠く見つめ暫く立ち尽くす。

辺りは静寂に包まれていた。立ち尽くしていつ創真自身も動く気配が一向になかった

動いているものは時たま吹く風に煽られ、揺れる、指輪にチェーンを通して作られたネックレスだけであり、風で揺れるたびに光を反射し輝いていた。

静寂の中に立ち尽くす創真、真希を探しているにも関わらずいまだに動く気配がみられない。

(みつけた！)

心中で大きく叫ぶ。

静は破られ地面をける音が響く。

静は破られ体が動き出す。

創真が暗い闇の中へと駆ける。

駆けて行く者が見えなくなる瞬間に一つの小さな輝きが見えた。

そして、闇夜の中人の気配が完璧に消えた

「少し買いすぎちゃったかな」

手に下げているレジ袋を眺めて言葉を漏らす。

「皆も待っているし早く帰らないとね」

研究所の方に進もうとした刹那、何者かに取り押さえられた。

(え、何！？ とりあえず、風でぶっ飛ばすか？)

など、思案している最中に取り押さえられている男が耳元でつぶやく。

「抵抗をするな、そうすればお前の身の安全は保障する」

(抵抗するなつてこの状態でしない方がおかしいでしょうが！)

ぶっ飛ばすと決意する。

男が続けてつぶやく。

「保障するのはお前だけであつて、研究所にいる者の安全を保障するか否かは、お前の態度しだいだ」

(まさかこんなのが向こうにもいるの？ それともただのはったり？ いや、今はこいつの言う事を聞いておく事が先決か？)

万が一、研究所の方にもこんな奴らいる可能性を考えて今は大人しく従う事にした。

そして、自動車の中に連れ込まれる。

私の後に続き男も自動車に乗り込む。

「どうも、いらっしやいませ。彩吹真希さん」
運転席の方から女性の声がする。

「どうも、ご招待頂きありがとうございます」

（なんなのよ、一体こいつらはいったい何？ とりあえず今は弱気なところは見せるべきではない。努めて強気でいかないと）

「あら、威勢のいい元気な子で」

「それはどうも、で、なんの御用でしょうか？ わざわざ世間話をするためにこんな事をするとは思えないんだけど」

「あら、そんな焦らないで本題は後で話してあげるから。まずは携帯電話を出してもらえないかしら」

「残念ながら、今は持っていないわ。近くのコンビニに行くだけのつもりで、こんな寄り道をする予定はなかったもので」

（ホントなんで携帯もってこなかったのかしら）

「あら、そう、ならいいけれど。ならここからは本題ね、もうわかっていると思うけれど私たちはあなたの事を誘拐させてもらうわ」

（まあ、どこからどう見ても誘拐だしね）

「私を誘拐してどうするつもりなのかしら？」

（ここは、相手の目的を知るためにも、なるべく多く話して情報を得ないと）

「目的ねえ、それは後で話すとしてあなたのご両親はどうしているのだっけ」

「私の両親がどうかしたんですか」

「いいえ、ただの興味本位で訊いているだけよ。で、どうしているのだっけ？」

「最先端区域で働いているわよ」

「そう、最先端区域で働いているわね」

（知っているのならば訊くのかしら）
続けて自動車を運転している女が話す。

「最先端区域って、凄いとこよね、研究設備は物凄く充実しているし、いい所よね」

「そうみたいですわね、それがどうかしたんでしょうか」

「私もね最先端区域で働きたいのよ。でも、まだ私には招かれるだけの実績がないのよ」

「だから、それと私を誘拐する事に何か意味があるんですか」

真希の話を聞いているのか、いないのか、わからないが女が話を続ける。

「自分で言うのも難だけれど、私は科学者としての実力はかなりのものなのに、なぜ招待されない」

(自意識過剰なだけなんじゃ)

「そして、辺りを見回して気がついた。研究所に備え付けられている機材がどれだけ低スペックでクオリティーが低いかを、こんなものでは素晴らしい実績なんて残す事はできない、と」

「そうなんですか」

適当に相槌を打つ。

「そうなのよ、だから私は誘拐をした」

「唐突に答えだしましたね。正直いって文が幾つか飛んでて何を言いたいのかわからないんですけれど」

「あら、わからないの？ 簡単なことよ、あなたを使って身代金を請求しようって事よ」

「それだったら、なんで私なんかを誘拐するのかしら、他の人を狙った方がお金が手に入るのに」

「あら、そんなかまととぶらなくっていいのよ。ある程度の事は調べてあるんだから。あなたの両親は最先端区域で働いているわね」

「それは、さつきも言ったと思いますけど」

「その両親から毎月、大量の生活費を振り込まれているみたいね」

「まあ、よくご存知で」

「それでも振り込まれているお金は給料の極一部みたいのよね」

「へえ、そうなんですか。でも、誘拐する相手が私でよかったです」

「ええ、私たちも最初からあなたをターゲットにしていたから意見が一致して嬉しいわ」

「なんで私を？」

「理由は簡単。御友恵理奈は確かにお金を持っているけれど狙うにしてもリスクが高すぎる。私たちも流石にレベル8を相手にしたくはないわ。そして浅石流深こいつを誘拐して、御友恵理奈から巻き上げようと思ったけれどこいつもレベル7と厄介。最後に彩吹真央、彩吹真央このどちらかを誘拐するとしたら、あなたになつたわけ」

「私を選んでくれたことは感謝します」

「真希の方にした理由は簡単二人ともレベル3なら、姉の方を誘拐して妹を自由に動かす。姉が危険な身にあるって知れば、あなたより従順に動いてくれそうだしね」

「その判断は正解ですね。私が残されていたら、どんな手段でも使って乗り込んでいましたし」

（本当に私の方でよかったわ。真央は本当にレベル3だから。私ならその気になればいつでもここから出られるし）

自動車が十字路を左へと曲がる。

「さて、もうそろそろ私の研究所が近い事ですし」

一拍間を空けて話す。

「眠ってもらおうわ」

ピリッ、

真希の隣に座っていた男がスタンガンで真希を気絶させる。

朦朧とする意識の中、最後に車窓からの夜空が見えた。

「恵理奈さん！」

キーボードの音だけが響いていた部屋に大きな声が轟く。

「どうした」

「いきなり移動しました！」

焦り、驚いていた。

「どこに行った」

「エリア8の15 8です!」

「馬鹿な、さつきまで公園に居たのだぞ」

恵理奈さんも珍しく驚いていた。

「はい、走り出したと思っただら次の瞬間には移動していました!」

「電波は問題なく受信しているか」

「はい、なんの不具合もでてないです!」

「ならいつたいなんなんだ。まさか・・・いやありえないな」

何か考えが浮かんだが、一瞬で一蹴した。

「桜空の能力は確か速遠兼眼レベル10だったな」

流深ちゃんに確認を取る。

「はい、そうです!」

「人は一人一つの能力しか持てない。なら、これはどう説明すればいい」

創真の瞬間移動に困惑する。

「実際の能力は瞬間移動系テレポートの能力だったが、テストで上手く欺いた

か? いや、それでもおかしい。御友高校前公園からエリア8の1

5 8までの距離は瞬間移動レベル10でも一回で飛べる距離では

ない。流深、他の場所で電波は発信されたか?」

「いいえ、されてないです!」

「そうか・・・手掛かりが他にない以上そこに向かう。流深、行くぞ」

「はい、行きます!」

二人が颯爽と玄関へと向かう。

「真央、留守番頼んだぞ、必ず連れて帰ってくる」

「はい、わかりました。待ってます」

赴く者、佇む者、ここで二者に別れる。前者二人は玄関を立ち、後者は椅子に座り祈りを送る。立つ場所は違えど、同じ思いを持つ者達の心は一つである。

研究所の隣に建つガレージへと向かう。

ガレージへと着き、シャッターを開け、勢いよく、綺麗にバイクに跨る恵理奈さん、その後ろにちよこんと座る流深ちゃん。

「流深、あれの準備をしとけ、大きな戦いになる可能性が高い」

「はい、わかりました！」

返事をするなり垂れ下がっていた袖を捲った。

シャッターが自動で閉まり、バイクを噴かす音が辺りに響く。

「行くぞ」

「はい！」

バイクの轟音が響きわたり、テールランプが赤く尾を引いて行く、何もかもを包み込むかの様に黒く染まった空の下を。

第3 - 2章

「ここか」

平屋建ての古びた建築物の前で一つの声が聞こえた。

「待っててくれ」

声の主と思われる姿の影が街灯の光を受け地に伸びている。

「今から行くから」

その影が徐々に大きくなり、建築物へと一歩ずつ近づく。

「絶対に助けるから」

そしてドアノブに手を掛ける。

ガチャッ、

鍵がかかっており開けることができなかった。

他に入り口がないかと辺りを見回すが、それらしきものは見当たらない。

平屋の建築物の回りには、困うように出入口だけを空けた塀があるだけだった。

(どうするか)

考えを巡らせるが一瞬で案が浮かぶ。
すぐさまそれを実行に移す。

ドゴンッ、

ドアノブを蹴り壊し無理矢理中へと入る。

「お邪魔します」

律儀にちゃんと挨拶までして。

入った先にあつたのは狭く、暗く、長い廊下だった。

その廊下の右側に扉が2つ、左側にも扉が2つ、奥の突き当たり

に扉が1つある。

(蝨潰しに全部回るのもありかも知れないが、ここは一番広そうな所から行くか)

そして、廊下の一番奥にある扉へと手を掛ける。

「ありや、当たり前」

少し笑いながらおどけてみせる。

そこには十数人の男が立ち並んでいた。

「やっぱこう言うのっていつ見てもおっかないな」

その男たちは一応にサングラスを掛けていた。

「んで、定番だとあんたがこの中のリーダーって 所？」

その男たちの丁度真ん中に立ち、背丈こそは回りと比べても大差ないが、別格の雰囲気醸し出している男へと話し掛ける。

「・・・」

反応がない、ただの屍のようだ。

じゃなくてまさかの無口キャラですか！

いや、もしかしたら本当に聞こえていなかったただけかも知れない。

と言うことでもう一度話し掛けてみる。

「あんたがこの中のリーダーか？」

「・・・」

反応がない、ただの屍のようだ。

もつやだ！ 俺、無口な人苦手！

と、心中で大ダメージを受けていたが、それを表に出さず話を続ける。

「とりあえず真希を返してもらいに來たんで、そこを退いてもらおうか」

「・・・」

数十人も人がいるとも思えない程の静寂だけがあった。

そうですね、今までのパターンのにそこも無言ですよ！

わかっていたので今回はそれほどダメージを受けなかった。

静寂を切って足音が響く。

「・・・！」

驚かされた。敵の皆さんが、俺が通れるように、奥の部屋へと繋がる扉の前に道を空けてくれた。

（折角だし通らせてもらうか）

扉へ向け二歩、三歩と進む。

男たちを横目に残り二歩、三步の所に着く。

そしてドアノブに手を掛けた刹那。

ドンッ、

低く鈍い音が唸る。

地面には罅が入り、砂煙が昇る。

「やっぱりか」

拳を地面に打ち付けた 男の腕の横に1人の少年が立っていた。

「確かにその能力じゃ、こんなことしなきゃまともに食らわせることはできないな」

避けられたことに驚く 男を横目に、まだ話す。

ボディーストレNGTH

「肉体強化系の能力レベル5って所か、まあそんな大振りじゃ俺には当たらんよ」

ようやく砂煙が静まる。

「なら、今度はこっちの番だな」

殴ってきた男の正面に回り、鳩尾へと鋭く膝を入れる。

短くうめき声をあげてその場に突っ伏す。

「ようやく声を出したか、今度はどいつが喋ってくれるんだ？」

威勢よくいい放つ。

辺りを見回して見ると、既に半円に取り囲まれていた。

背中には壁、正面には敵、逃げ場のない状態になっていた。

「四面楚歌ってやつか？」

絶体絶命の状態にも関わらず口元は笑っていた。

そして、正面の敵へと 向かって突っ込む。

男も応戦と殴りにくるが、それを紙一重でしゃがみ避け、前へと伸びている腕を掴み、背負い投げのように投げ、敵の背中が地面に着くと同時に腹を踏みつけ気絶させた。

「この用心棒はこの程度のレベルか？」
鼻で笑う。

横からフックのように殴り掛かってきた男の腕が振られている最中に、腕の外側を掴み、中腰になり右足を掛け相手の勢いを利用しつつ地面へと打ち付ける。

そして追い討ちと、また腹を殴り付け気絶させる。

「一丁あがり！ 次はどいつだ？」

いつの間にか三人に囲まれていた。

そして、同時に襲い掛かってくる。

最初に殴り掛かってきた相手の腕の横を殴り軌道を逸らせ、襲いかつてきたもう一人の顔面を殴らせる。

そして、残る一人の懐に素早く潜り込み、また背負い投げのように投げ、仲間の顔面を殴っていた敵の上へと落とす。

今投げ、重なっている敵に追い討ちと思いつき踏みつける。

三人をあつという間に片付けた。

刹那、少し離れた場所から椅子が物凄い速度で飛んできた。

それを、体をそらしギリギリでかわす。

「今度は少し骨がありそうだな」

ポケットに手をつ込み、真希に斬られた物干し竿を取り出す。

スピードコントロール
「速度調節系のレベル5か6って所か？」

また、椅子が飛んでくる。

だが、今回は不意打ちではなかったので、体は飛んでくる椅子が右側を通り抜けることが可能なほど避けた、が、それを物干し竿で打ち返し、近くにいた敵の所へ飛ばし三人ほど倒した。

物干し竿には椅子を打ち返したせいで凹んではいたが、構わず椅子を飛ばしてきた相手の所へと駆ける。

二発程また椅子が飛んできたが、物干し竿で叩き運動方向をずら

してかわした。

そして、物干し竿が届くまでの所に着き、真希によって斬られた先では刺さずに、普通に殴り戦闘不能にさせた。

「真希が近くにいるんだ、死人は出したくない」

今さつき倒した敵を見下しながらいい放つ。

すると隣の部屋から。

ドゴーンッ、

爆発音のような音が轟く。

（何があつたかわからんが急いだ方が良さそうだな）

「もうそろそろ終わりにさせてもらうぞ」

今一度辺りを見回すと立っていたのは二人だけだった。

1人は手下その1といった感じの男、もう1人は最初に話し掛けたリーダー的な男。

まずは手下その1を潰そうと、突っ込む。

すると相手は右手を前に差し出す。

差し出す先に赤く光る粒が渦巻く。

渦巻くものにはつきりと輪郭がついた。

輪郭がついたものは赤く燃え、渦巻く火球だった。

火球を物干し竿で打ち消す。

「今度は発熱系イミトフラストのレベル6って所か？ 色々と能力者がいるな」

感心しつつも次々と飛ばされてくる火球を避け、打ち消す。

（流石中ボスのポジションにいただけあって面倒だな）

間髪なく飛んでくる火球のため一気に距離を詰めることが叶わずにいた。

だが、着実に一歩ずつ近づく。

（どうやって一気に近づくか）

考え近くにあった椅子を投げつける。

が、やはり火球を撃たれ勢いを相殺された。

(ここだ！)

相殺され、空中で一瞬制止していた椅子に次発を決めるために走り込んでいた勢いそのままに物干し竿を打ち放つ。

度肝を抜かれた攻撃に火球を撃つ猶予さえなく、無情にも体に椅子が飛び込む。

飛び込む勢いに負け体が後ろに押され、背後の壁に頭を打ち、意識を失う。

椅子を打った代償で遂に物干し竿が2つに折れた。

「次はボスのあんたが倒れる番だな」

そのボスの男はいつの間にか、野球ボール大のコンクリートの球を持っていた。

「今度は野球でもするのか？」

最後の男はピッチャーかのようにコンクリートボールを投げる。

コンクリートが飛んでいるとは思えない程の速さで投げられた。それを折れた物干し竿で打ち返す。

カーン、

甲高い音が響く。

ドンツ、

重鈍な音が響く。

打ち返したコンクリートボールが男の横を通り抜け、壁にぶつかり碎ける。

打ち返すために使った物干し竿はボールの威力に負け、後方へと飛ばされていた。

碎けたコンクリートを見ると中は野球の軟式ボール同様空洞になっていた。

「よくそんな投げれるな、野球選手になった方がいいんじゃない

か？」

両の掌を背後の壁にやり、右手で壁のコンクリートを引き、ボール状に形作る。

「そうか、形質変化系ハードソフトのレベル7って所か、この中じゃ一番レベルが高いな」

一気に走りだし距離を詰めに掛かる。

(遠距離系の敵を相手にするなら、これが妥当だろ)
蹴り飛ばすタイミングを図りながら近づく。

(それにもうあれを打ち返せそうにない)

先程のバツティングで腕が痺れ、腕に力が入らなかつた。
途中投げられたボールを難なくかわし、敵の目前まで迫る。

だが、足が地面に飲み込まれ、前のめりになり転びそうになった所に、狙っていたかの様に顔面に拳が飛んでくる。

ギリギリで体を右に反らしかわしたが、拳が掠れたせいで、左頬には切り傷があつた。

(なるほど、右手で投げたボールは囷で本命はこの足元の罠か)

「通りで左手を壁から離さない訳だな」

(壁から手を離さない訳は、力を継続させるのが理由だろう)

一先ずこのままでは一方的に殴られるだけなので、敵の能力によって軟化し足を掴まれている中、上手くバランスを保ちながら後退する。

男が壁から左手を離す。

能力が解けたと思ひ足を持ち上げる。

(・・・！)

驚き、焦る。

確かに能力は解けていた、足首まで地面に埋まったままで元の固さに戻っていた。

男が近づいてくる。

無表情のまま一歩ずつ。

着実に進み、創真の正面に着く。

「・・・」

無言で立つが拳を握る。右腕を後ろに引き、そのまま動作の続きのように前に拳を放つ。

顔目掛け飛んできた拳を頭を動かしどうにかかわす。

(顔だったからどうにか避けれたが体を狙ってきらた避けられないぞ！)

心中で安堵と焦りが交錯する。

男はまた顔を殴ろうとしてくる。

それをまたかわす。

その後も何発か顔を殴ろうとするが、全て避ける。

(こいつ遊んでいやがる。どうやら腕が使えないこともばれているみたいだな) いまだに顔を必要に狙われているが、全て避ける。

(こうなったら無理矢理にでも隙を一瞬作らせるか)

何かの作戦を決め、それを実行へと移す。

拳を避けた後に生じた隙に、力の入らない拳で相手の顎にアップアを打つ。

倒すことはかなわなかったが、一瞬上を向かせ隙を作った。

そして、男の視点が殴られる前に戻った時には創真の姿は消え、ネックレスの反射光の残像だけがあった。

「終わりだ」

「うっ」

短いうめき声を残し、男が倒れる。

倒れた者の後ろには一つの影があった。

その影の招待は創真であった。

いつのまにか後ろに回っていた創真が、体を回転させ、遠心力を利用して 敵の首をいつの間にか掴んでいた物干し竿で殴り、気絶させたようだ。

(やっと終わったか・・・じゃない、真希！)

思いだし、先程入ろうとし、拒まれた扉へと手を掛け、開ける。扉を開けるなり大声を出す。

「真希！」

(ここはどこ?)

まだ薄い意識の中で考える。

(体が重たくてうごかない)

腕を動かそうとするが、自由が利かない。

「ここは？」

どうにか声を発する。

「あら、お目覚めになったの」

どこかで聞いたような声が反ってくる。

薄い意識の中、瞼を開ける。

ぼやけた視界の中には、白い服を着た人のシルエットが見える。

「あなたは？」

視界かぼやけているせいで、誰か判別することができない。

「もう忘れちゃったの？ 悲しいわね」

視界かが徐々に回復し、話している相手が白衣を着ているのがわかった。

(白衣を着ているけど、うちの研究所の人じゃなさそうね)

視野を上に向け顔を確認する。

「・・・！ 今ちようど思いだしたわ」

睨む様に相手を見つめる。

「あら、そう、それはよかったわ」

「私的には、さっきの出来事が夢落ちで終わってくれたら助かったの」

自動車に乗せられてからのことを思い出す。

「まあ、そんなつれないこと言わないで欲しいわね」

「そうですね。そんなことより、誘拐したのは本当に私だけなんで

しょうね?」

辺りを見回して見るが、真希と誘拐犯以外は見当たらない。

「安心していいわよ。あなたしか拐っていないから」

「ならよかった」

安堵の息を漏らす。

(もし、私以外に誰かいるのなら、無理矢理にでも助けて逃げていたわね)

大言に聞こえるかも知れないが、実際に助け出すだけの実力を有しているからこそ及んだ思考であった。

(私1人みただし、もう少しここにいて情報収集をしますか) 今すぐは逃げないと決めた。

少しでも情報を得ようと、はつきりとしてきた視界で見渡す。

部屋の形は長方形で、床も壁も天井もコンクリートがむき出しになっっている。

部屋の中はすっきりとしており、観葉植物が数本あり、他にあるものと言えば、机の上に加湿器が置いてあるだけだ。

扉は部屋に二ヶ所。

1つ目は真希から見て正面、誘拐犯から見て背後。

2つ目は真希から見て右側、誘拐犯から見て左側。

扉のない他の壁には窓もなく、部屋の灯りは、天井に吊るされている照明が1つあるだけであった。見回して思ったことを率直に言う。

「随分と暗いところね」

「まあね、ここは元々仮眠室だからね」

「仮眠室って言う割には布団がないですけど?」

個人的に気になったのかどうでもいい事を訊く。

「あなたを招待するために片付けたのよ。眠たいなら隣の部屋に布団があるから、用意してあげましょうか?」

「大丈夫です。もうゆっくりと寝させてもらったみたいですし」
「気絶させられていた事を揶揄する。」

すると、誘拐犯は方耳を押さえる。

髪に隠れてよく見えないが、イヤホンを付けているようだ。
イヤホンからの話を聞き終えたのか話だす。

「あなたにとつて良いお知らせよ」

「・・・一体何？」

疑いながらも耳を傾ける。

「どうやったのかわからないけれど、あなたの仲間がここに来たみたいなの」

（まさか、恵理奈さん！？）

続けて誘拐犯が話す。

「昨日からあなたの所に泊まっている少年が来たのよ」

「なんだ、創真か」

落胆からか、思わず声を漏らしていた。

「創真って言うのねあの少年」

（あつ、）

要らぬ情報を与えていた。

（まあ、名前が知れたからって何かあるわけじゃないし、まあいいか）

「1人で乗り込んで来ているみたいだけどあの子は強いのかしら？」

「残念なことに、仮想戦闘機で戦ったら、私に負けました」

「あら、そうなのなら警戒する必要はなさそうね」

（本当に警戒しなくても助かると助かるんだけどね。私といい勝負できるから、余程強い人がいなかったら大丈夫でしょ）

短絡的に考える。

「しないでもらえると助かります」

「あら、でも残念。すでに侵入しているから、迎撃させてもらうわ」

（ああ、もう創真のバカ）

「その迎撃する人たちって強いんですか？」

「そうね、強いわよ。レベル5以上のが何人かいるしね」

（何人かってことは複数人創真の所にいるのか、一対一なら負けな

いだろうけど、複数はどうなんだろう)

信頼と不安が混ざる。

(こいつを倒して早く創真を助けないと)

早急に脱出すると決めた刹那。

ドンッ、

轟音と共に地響きが正面の扉からする。

「あら、始まったいや終わっただかしら」

(本当に急がないと！)

心中でいくら焦ろうがそこには障害があった。

1つ目は手足が縛られており、自由がきかないこと。

2つ目はここが空気の流れがない、密室であること。

1つ目の障害は身動きが取れないことだったが、2つ目は能力が十分に発揮できないという障害だった。

なぜ能力が十分に使えないか、風使いは分けると二種類ある。

一種類目は自らが起こした風を強化するタイプ

二種類目は空気の流れを操って風にするタイプ

真希はこの後者のタイプだ。

空気の流れがない密室では回りの空気を大量に飛ばしても圧縮するだけになり、十分な威力が出せない。

なので真希は十分な実力を発揮できないでいる。

「終わってなんかいないよ」

(どうやって逃げるか)

真っ先に浮かんだのは手足を縛っているロープを切り裂くこと。

だが、それを実行しないでいた。

「あら、そうかしら」

「ええ、そうですよ」

(ここじゃ、上手く力を調節できそうにないわね)

加減を間違えて自分を傷つける可能性が高いので、別の手を考え

る。

「なんでそんなことが言えるのかしら」

「教えて欲しい？」

(これだ！)

一つの案が浮かぶ。

目に付けたものは、誘拐犯の後方にある加湿器。

「なら、是非教えて頂戴」

「理由は簡単よ、創真のことを信じているから」

加湿器のコンセントを力任せに起こした風で切断する。

斬られた先からは、電気が火花のように飛び散る。

「信頼ね、理由はそれだけかしら」

「それだけあれば十分だと思いますよ」

今度は加湿器を持ち上げた。

フラフラと不安定に空中を進み、切ったコンセントの前で静止さ

せ、倒し中の水を零す。

零れた水が切れたコンセント先、火花に触れる。

「青春らしい理由で面白いわね」

「青春の中にこんな思いでもできて欲しくなかつたですけれど」

火花に触れた水がどんどん気化して行く。触れないものは風で押

して触れさせる。

「またそんなつれないこと言って」

「こんな状況を喜ぶ人の方が少ないと思いますよ」

零れていた水がほとんど気化する。

今までは視界の隅で捉えて、相手に気づかれないように見ている

それにわざと視線を送る。

「あら、そっちに何かあるのかしら」

「え、何のこと」

わざと見たということに悟られない様に、こう答えた。

相手が視線を向けた方へと振り向く。

「あら、いつの間にかこんな事をしていたの」

「さ、さあなんのことがしら」

「誤魔化すのが下手ね。こんなことをしたら危ないでしょ」
恐らくコンセントを抜くために加湿器の方へと歩く。

（作戦通り）

「しまっ」

相手の声を遮って1つの音が鳴る。

ドゴーン、

爆発音が部屋に轟く。

爆発音は、加湿器の辺りから鳴った。

爆発を起こした犯人は真希、被害者は誘拐犯。

どうやって爆発を起こしたかというところ、水を電気分解した際に発生した水素を操作し、火花に触れさせ、爆発させた。

爆発の衝撃で誘拐犯の女が飛ばされていた。

（爆発で壁が壊れてくれればよかったのに）

流石コンクリートでできているだけはあって頑丈であった。表面が多少崩れ焦げた程度で済んでいた。

（でも、一番の狙いは達成できていたみたいだし、いいか）

女は飛ばされて床の上に寝転んでいた。気絶はしておらず、意識はハッキリという訳ではないがあるようだ。

（このままのびていてくれると助かるんだけど）

今は爆発の衝撃などでダメージを受け、寝転んでいるが、直撃していたわけではないので、いつ起き上がってきてもおかしくはなかった。

（さて、この後どうしましょうか）

最良のシナリオは、先程の爆発で壁が壊れ、外と繋がることだったが、失敗に終わった。

そこに真希以外の声が鳴る。

「こんなこと、あなた程度のレベルじゃできないのにどうやったの

かしら」

爆風で飛ばされた女が、仰向けの状態のまま、こちらを見つ訊く。

「簡単なことよ」

（意識があつたのか）

そして、仰向けで地面に倒れている女へと視線を送る。

爆風で飛ばされたにしては服についていた汚れは、地面を転がった時についた砂埃程度で、焦げたような跡がついていなかった。

「私がレベル3じゃないってこと」

「あら、本当はレベルいくつなのかしら」

さつきまでと比べて、話し方が若干弱々しい。

「特別に教えてあげるわ、私の能力は空気変動エアオペレーターレベルは9よ」

「・・・！」

そんな馬鹿なつと驚いた顔をしていた。

「だから真央じゃなくて私の方を拐った事は感謝しているの」

「ということは私たちは一番のジョーカーを連れてきたということか」

自嘲気味に笑う。

「そういうことね。私たちにとってはラッキー7とまではいかないけれど、なかなかいい手が残っているから」

「・・・」

誘拐犯は黙っていた。

「本当の事を言ったついでにもう1ついうと、いつでもあなたを倒すことができるのよ」

「あら、なら何故そうしないのかしら」

「傷つけたくないのよ」

「あら、もう十分に傷つけられたのだけれど」

仰向けで寝転んで動けないでいるのだから、十分に怪我を負っていた。

「それは結構ましな方だと思つよ。わざわざあんな面倒臭いことま

でしたんだから」

爆発の事を思い出しながら言う。

「あら、これでましただなんてよく言えるわね。酷かったらどうなっていたのかしら」

「そうね、もしかしたらあなたが死んでいたかも知れないわ。私はこんな密閉された空間の中だと、力を上手く制御しきれないのよ」

「あら、だから爆発にしたの？ 随分と乱暴ね」

「そうかもね、でも結果的にはよかったわ。あなたを動けなくなる程度まで弱らせることができたから」

「私が動けなくなった所でなにか変わるのかしら」

率直な疑問を投げ掛ける。

「変わるわね、創真が助けに来るまでの時間を確実に稼げたわ」

そう言っつて疑問に答えた。

「あら、でもその時間稼ぎも意味がないんじゃないかしら」

「どういうこと？」

今度は真希が疑問を投げ掛けた。

「さっきも言っただけれど、その子は今私の部下に迎撃されているのよ」

先程地鳴りが聞こえた方向へと視線を送る。

「それがどうかしたの？」

「あら、普通のことでもが、大人十人以上を相手にして勝てると思うかしら」

「思わないわね。なら私からも質問していい？」

「いいわよ」

「レベル5〜6程度の能力者が十人以上いたら、レベル10の能力者に勝てると思う？」

「難しいわね。・・・まさか!？」

「ええ、そのまさかよ。アイツはレベル10、だから負けない」

「あら、でも仮想戦闘機ではあなたが買ったんじゃないかかしら」
「まあ勝ちましたけど、アイツには私の攻撃が一回しか当たらないか

つたし、手加減していて最初から負ける気だつたし」

怒りを込めたような声で答えた。

そして一拍置いて真希がまた話す。

「だから創真は絶対に負けない。それに私は創真が助けしてくれると信じてる」

「そう」

今度は青春らしいと茶化さず、短く受け答えた。

そして部屋の中に静寂が訪れた。

静寂の中に居るのは二人。

一人は手足を縛られ、動けず壁にもたれかかる者。

一人は体を強く打ち、動けず床に寝転んでいる者。

そこに静寂を破る音が鳴る。

「真希！」

扉を勢いよく開け、一人の少年が飛び込んできた。

「やっときた、遅いわよ」

入ってきた少年に安堵の表情で答える。

「悪いな、ちよつと邪魔が入って遅れた」

悪びれた風もなく答えた。

「全く一人で乗り込んできたって言うか、ら心配していたのよ」

「俺の事は心配しなくて大丈夫だよ。それより、真希の方は大丈夫だったか？」

真希目の前まで歩む。

「ええ、大丈夫よ。そこに倒れてるのがいるでしょ」と、目線を送る。

「ん？ いないぞ」

目線を辿った先には誰もいなかった。

「え、でもさつきま」

「いや、ちゃんといるぞ」

創真が入ってきた扉とは別の扉の前にいた。

「あら、ようやく気がついてくれた？ 仲良くしている所に割って入るなんて無粋なことしたくなかったから待っていたけど、もう少し早く見つけて欲しかったわ」

「それはすみませんでした」

かばうように真希の前に立った創真が答えた。

「あら、素直な子ね、でも、もう終わりにしてあげるわ」

ふらふらな女は右手を前に差し出す。

「え？」

真希が思わず声を漏らしていた。

声を漏らした理由、それは、差し出された手の先にあった。

その先に握られていたものは拳銃。

「あら、安心していいわよ彩吹真希、あなたは狙わないから」

女は創真の方へと照準を合わせる。

銃口は創真に向けられたが、それを撃とうとしている者は、体に入らないのか壁に体重を預けていた。

「撃つのは構わんが、ちゃんと俺に向けて撃てよ！」

張った声で力強く女を睨み付ける。

創真の物凄い剣幕に一瞬おののいた。

「あら、なら遠慮なく撃たせてもらおうかしら」

握られていた拳銃の引き金に指がかかる。

そして、

パーン、

乾いた音が部屋中へと響き渡る。

星がまばらに輝く夜空　の元を一台のバイクが物凄い速度で駆け

ていた。

そのバイクに跨っていたのは、恵理奈さんと流深ちゃんであった。恵理奈さんがバイク中央のカーナビの様なものを操作し、どこかへ電話を掛ける

『はい、もしもし』

「私だ」

ヘルメットの中にマイクとスピーカーが入っているらしく、よそから見たら普通に運転している様にしか見えない。

『ああ、御友か今度はなんの用だ？』

「お前らに依頼だ」

話し相手は男。

『だから、前も言ったが俺に電話するんじゃないやなく普通に通報しろって』

「そんな事はどうでもいい。依頼を受けるか否か答えろ」
相手の返答など意に介さず話した。

『それに、依頼じゃなくて普通に通報しろよ。で、何があつたんだ？』

嘆息交じりの声に現状を伝える。

「真希が誘拐された。それで今私は犯人がいると思われる場所に向かっている」

『誘拐か、場所がわかってるなら今から向かう、どこだ？』

「場所は教えるが、私が指示するまでは待機してる」

『は？ 何でだよ、場所がわかってるなら、俺たちが行った方が手っ取り早いじゃないか』

「勘違いするな、私は国民の義務として警察に教えたただけだ。お前たちは逮捕だけしろ。真希は私たちが助け、犯人に痛い目を合わせず感情的な声で言い放つ。」

『本気で言ってるのか？』

「ああ、本気だ。私の条件が飲めないなら場所は教えん」

『・・・だが、相手が武装している可能性がゼロじゃないんだ、だ

から俺たちに任せろ。俺たちはそういうのを想定した訓練を受けているんだからさ」

「なら、そいつ等と私たちが戦ったとしたら、どちらが勝つ？」

『それは、・・・わかったよ、その条件を飲む』

「わかった。場所はエリア8の15 8だ」

『了解。俺たちはその近くで待機させてもらうよ』

「ああ、任せた」

『ちゃんと指示しろよ、それに合わせて突っ込むからよ』

「ああ」

『それじゃ、またな』

電話が終了した。

「交渉成立だ。もう少し速度を上げるぞ流深」

「はい！」

バイクの唸る音がより大きくなり、速度が増す。

一分一秒でも早く目的地に辿りつくために。

乾いた音がなった後、部屋が静寂に包まれる。

静寂を破り口を開くのは銃を撃った女。

「あら、これはどういうトリックかしら」

されに受け答えるのは、創真。

「トリックなんかないさ、実力だ」

「あら、実力でそんな妙技ができるなんて凄いわね」

その妙技とは放たれた銃弾を持っていた物干し竿で弾いたことだった。

「アンコールならいくらでも受けるぞ。ただし、次からは全部アンタに打ち返すんで、そこんところろしく」

ホームラン予告をするかの様に折れて、元の半分程の長さになった物干し竿を誘拐犯に向ける。

「あら、そう、だったら遠慮なく撃たせてもらおうかしら」
そしてもう一発銃弾が放たれる。
爆発音と共に物干し竿を振り切る。
2つの音がほぼ同時に二ヶ所である。

カンッ、
ドンッ、

「え？」

情けない声を漏らす女。

放った銃弾は物干し竿によって見事に弾かれ、髪をかすれ顔の右側を通過し、後ろの壁に着弾していた。

「さあもう一発こいよ」

挑発をかます。

が、そんな挑発が応えられる事はなかった。

女は状況を理解し、その後恐怖かなにかで気絶し、その場に倒れこんでいた。

「片付いちまったか、なんか拍子抜けだな」

そう言い残して気絶した女に背を向け、真希の方に体を向け一言。

「よし、逃げるぞ」

真希の背後に周り、手足を縛っていたロープをほどき始める。

「全くアンタったら、ホント・・・」

「ホントなんだ？」

ロープがほどけ二人とも立ち上がる。

「なんで、こんな所にまで来るのよ！ 危ないじゃない」

そう言ってから俺の頭を軽く殴る。

「痛っ、いや、だって真希の事が心配だったんだもん」

殴られた所を擦りながら心配していた事を告げる。

「これでもしアンタが死んでいたらどうするのよ」

安心からか真希の目が若干潤んでいた。

「あれくらいじゃ死んだりしないって」
安心させようと笑顔で答える。

（実際さっき叩かれたのが受けた攻撃の中で一番痛かった訳だし）
「でも、ありがとうね」

笑顔に笑顔で返し、創真の頭に手を置く。

「ああ」

涙ぐんだ真希に直視されお礼を言われ、照れ隠しか短く答え、視線を反らす。

（やば、今の真希可愛いすぎる！）

心中はもうお祭り騒ぎになっていた。

（でも、あの笑顔が見れて良かった。あんないいもの見れたんだから、それだけで今日の努力の対価どころかお釣がくるな）

背けていた視線を戻し微笑みかけ「じゃ、脱出しますか」と、声をかける。

「ええ、そうね。こんな暗い所さっさと出ましょう」

創真が先に部屋を出て続いて真希も部屋を後にする。部屋の中に居る誘拐犯に一瞥をして。

「うわっ、凄っ」

一枚扉を挟んだ部屋に着いた瞬間真希が声を漏らす。

「ん？ どうした？」

何が凄いかわからないので真希に訊く。

「どうしたって、これ創真がやったの？」

荒れた部屋、倒れている十数人の男、ひび割れた地面、これらのことを訊く。

「気絶している奴らは俺がやったけど、地面砕いたり、椅子壊したりしたのはこいつらだよ」

倒れている人たちを見渡す。

「そうなの」

「ああ、俺が壊した物っていえばこれくらいだよ」
地面に手を伸ばし、なにかを掴む。

掴んだものを「これ」と言って真希に差し出す。

「あつそれ物干し竿じゃない」

拾った物は、折れたのもう片方。

「そう物干し竿、俺が壊したのはこれくらいだな」

いまだに右手で持っていた物干し竿と、拾った物干し竿の折られた所を合わせる。

「どんな使い方したらそうなるのよ、ホントもう無茶して」

「まあ色々とコイツには頑張ってもらったよ」

闘っていたときの事を思い出す。

「それに俺は仮にもレベル10だ、こいつらを倒すことくらい雑作ないよ」

「私には負けたのに？」

茶化す様に訊く。

「うっ、まあそれはそれだ。早くこっから出よう」

少し焦った風に急かす。

「はいはいじゃあ出しましょう」

それに渋々従う。

そして倒された男たち の間を後にし、暗い廊下を抜け、外に出る。

「脱出完了ー」

創真が両手を上げ体を伸ばす。

「お疲れ様ー」

真希も一緒になつて体を伸ばす。

「じゃあ恵理奈さんに連絡取って迎えに来てもらおうか」

「そうね、じゃあ創真、携帯貸して」

困った様な顔をして「えっ？」と返し続けて話す。

「俺、携帯持っていないんですけど・・・」

「は？ なんて持っていないのよ、ホント使えないわね」

今までの中で一番の侮蔑の視線が送られる。

「いや、だってさ、自分の着替えも満足に持ってない奴が携帯を持

っていると思うか？」

「確かに持っているわけがないわね」

「だろう。そういう真希は携帯持ってきて・・・いないのか」

真希が外出した理由がコンビニに買い出しに行ったことだと、話している最中に思い出して、諦めた。

「うん。だつてさ歩いて5分位の所だし必要ないと思うじゃん」

逆の立場だったとしたら俺も携帯を持っていくとは限らないので、これ以上は言及しない。

「じゃあしょうがないから公衆電話でも探そう。小銭くらいはあるよな」

「あるわよ、買い物に出たんだからちゃんと持っているわよ、ほら」と言い俺の方に手を差し出す。が、

「あの、真希さん。どこにあるのでしょうか？」

真希は「えっ!？」と言つてから手元を見回す。

そして誤魔化すように笑いながら。

「鞆あの中だ」

「・・・」

互に見つめあう形で制止する。

「忘れちゃった。てへっ」

自分で自分の頭を軽く叩き、舌を出して可愛らしくおどける。

「・・・」

無反応で冷たい視線を返す。

「ごめん、自分でやっとしてんだけど、今はないわ」

珍しく謝った。

「うん、じゃあどうするか。近くに交番とかあればいいけど、ここら辺にはなかったし、しょうがない、戻るか」

嘆息しながらも決める。

「まあ、それしかなさそうね」

真希もあまり乗り気ではないが意を決した。

そして二人とも振り向き、建物を眺める。

「じゃあ行くぞ」

「ええ」

互いに確認をとり、中に入ろうとした刹那。
左側のシャッター
が開き、中から声が轟く。

「あら、忘れ物かしら」

「もう準備はできてるか」

「はい！ できてます！」

物凄い早さで進むバイクの上で確認を取る。

法廷速度を守っているのかと訊かれたら、自信をもって「いいえ」
と答えられる程に。

「そうか、ならいい。もう少しで着くからな」

「はい！」

街灯もまばらになってきた道を進む。

第3 - 3章

「もう準備はできてるか」

「はい！ できてます！」

物凄い早さで進むバイクの上で確認を取る。

法廷速度を守っているのかと訊かれたら、自信をもって「いいえ」と答えられる程に。

「そうか、ならいい。もう少しで着くからな」

「はい！」

街灯もまばらになってきた道を進む。

扉を押そうとした際にかげられた声に驚き制止していた。

「ええ、そうよ。私の鞆をこの中に忘れたみたいなのよ」
創真よりも先に答える。

「あら、そうだったの」
いまだに声だけがシャッターの奥、おそらくガレージから聞こえる。

「だから取らせてもらっわね」

「わかったわ、入らせてあげる。ただし」

そう言ってから言葉を止める。

「ただし何よ」

一向に言い出そうとしないので苛立って訊く。

「私が直接あなたを案内するけれど」

いい放った刹那、ガレージから巨大な何かが飛び出てきた。

「えっ！？」

また驚く真希。

「王道パターンだな」

妙な事を呟く創真。

ガレージから出てきた物は、シルエットからは人形と思われる巨大ロボットだった。

腕があり、胴があり、頭がある、脚はキヤタピラになっていた。

「いや、アンタ、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

焦る真希。

「ん、ああ、そうだな。こりゃそんなこと言ってる場合じゃなさそうだな」

冷静な創真。

「とりあえずここは逃げる？」

「その方が良さそうだな、パターンのには指先から銃弾が飛んでくるなんてことありそうだし」

会話が聞こえていたらしくロボットから声がくる。

「あら、その通りよ。よくわかったわね」

「マジっすか！ よし、逃げるぞ真希」

適当に言ったことが当たったことに驚き、急いで逃げると決める。

「あら、そうはさせないわよ、あなたには散々邪魔をされちゃたしね。無事に還すようなことはしないわ」

ロボットの右腕を創真に向ける。向けた腕の先にある五本の指が先がドームのように開き、中かに銃口が見える。

「終わりよ」

女の冷酷な声が終わりを告げる。

声の直後に無数の銃弾が地面に着弾した音が轟く。

撃たれた後には静寂と砂煙が残る。

「さあ、邪魔者が排除されたしあなたをもう一度招待してあげるわ」

「誰が排除されたって？」

砂煙が立ち上る中から声がする。

「！」

今度は女の方が驚かされる。

「助かったよ、真希」

「ホントよ、アンタただけ無茶したいわけよ」

「あら、一体どんな手品を使ったのかしら」

疑問に思う女。

「手品じゃなくてただ能力を使っただけよ。アンタの右腕を見てみ、創真に向けられていたはずの腕が狙いよりも下に向けられていた。なるほどそういうことね」

腕が真希の上からの風の攻撃により押されたことに気づく。

「そういうことよ。今度は全身を吹っ飛ばしてあげようか」
強気でいい放つ。

「だから、高レベルの能力者は嫌なのよ」

ロボットからそう呟かれる。

「それはすみませんね」

呟きに対して答える。

女は「聞こえていたのね」と言ってから話を続ける。

「私が高レベルの能力者が嫌いな理由は簡単に言えば嫉妬かしら。レベルが高いと言うことの優越感に浸っているのが許せないのよね」
真希が「そうなの」とうなずいて話を聞く。

「こんなは理由ならレベルの低い人なら皆抱いている様な理由よね、でもね、これが一番の要因なのよ。優位者はその地位を甘んじて受けとる。低レベル者には手が届かないものだというのに、そういうのが許せないのよ」

女の言葉を黙って聞いていた真希は少しの時間考えを巡らせてから口を開く。

「そうよね確かに、私もそう思うわ。でもね、レベルの高い人たちが皆あなたという優位者だとは思わないわ」

「あら、そういう発言は優位者だからできるのではないかしら」

「私はそうは思わない。少なくともあなたがそんなことをいうのは他の能力者に失礼だと思うわ」

「あら、どういうことかしら。レベルが高いそれだけで優位になるんじゃない？ あなたが今生活している学校という空間でもレベル

が高いだけで、持て囃される。能力をひけらかして悦に入る。そんな人もいるんじゃないかしら」

もう一度の沈黙。

「ええ、確かにそんな人もいるわ」

沈黙の中で思ったことを伝える。

「でもだからってそれがなんなの？ 能力っていうのはどこまで突き詰めても所詮はただの能力。それ以上でも以下でもないのよ、そんなんじゃ判断するな、アンタは自分のレベルに甘えて、今たっている場所に満足を得ているからそう思うんじゃないかしら」

「結局そういう考えは優位に立っているから言えるじゃないかしら。そんな人に私たちの気持ちが変わるのかしら」

「わかるよ！」

大きな声で叫び、ロボットの奥にいる女を見据えるかのように見つめる。

「私はね元々はレベル3だったのよ、まあだからってそのことで劣等感を感じたことはなかったのよ」

今度は女の方が話を聞く。

「でもね、両親が最先端区域に行った時に思ったのよ、私のお父さんとお母さんは本当に凄い人なんだって、だから、だからこそ、そんな両親を超えたい、物凄く驚かせたいそう思ってから私が両親を超える事ができる事はないかって考えて思いついたのが能力なのよ、勉強は嫌いだったから科学者でトップを取る事は諦めたけれど、能力者の中ではトップを取りたい、取るって決めたの。それから恵理奈さんに手伝ってもらって7年間ずっと能力開発をしてきたのよ。もちろん今も続けているわ。あなたは諦めないことを諦めた。私は諦めていないそれだけの差よ」

女は無言だった。何も言い返さないという事は、真希が言っていた事が的外れではなかったという事だろう。

「だから私は自分のレベルの事を自慢したりはしない、アンタが私をレベル3だと思ってたように、学校の人も皆レベル3だと思って

いる。尊敬されるようなことは何一つしていないんだし、それで持て囃されるのも嫌だしね」

「あら、だったら正当な評価を受けなさい。それが努力に見合う当然の対価なのだから。それに、そんな理由でレベル3と偽っているのなら、他のレベル3の人に対して失礼になるんじゃないかしら」

三度目の沈黙。

「そうね、わかった。私はもう自分のレベルを偽らない」

何かを得心し、決意した強い声。

「そう、それはいい心がけね。最後のご講義ありがとうございました」

いい終えた刹那、右腕を真希へと向ける。

「あなた達を始末して逃げさせてもらうわ」

銃弾が放たれる直前に真希の前に回りこみ、右腕をまえに突き出す創真。

「創真逃げて！ 今回は間に合わない！」

目の前には私を庇おうと立っている創真が見えたと同時に、銃弾が飛び二人へと向かう。そして、人の命を奪うには十分すぎるほどの灰色の雨が降った。

「え！？」

状況を理解できずにいる創真と女。

「あつ！」

状況を理解し、安堵のため息を漏らす真希。

なぜ二人が無事だったのかその理由は、二人とロボットの間突如現れた黒い塊にあった。

その塊が銃弾を受け止め二人を守ったのであった。

「あら、今度こそどんな手品なのかしら。皆目見当がつかないわ」
無理難題を突きつけられ困惑する。

「だから、能力よ」

その問題に真希が一瞬で答える。

「あら、ありえないじゃないか。あなたの空気を操作する能力のではありません。んな事は不可能じゃないかしら」

「誰が私の能力って言った？」

「あら、じゃあ誰かしら」

「気付かないの？ この音に」

どこからか、唸るような音が近くで聞こえる。

「あら、確かに何か聞こえるわね」

「あ、本当だ」

二人が気づく。

「アンタ、逃げるなら今のうちよ」

「あら、それは私に言っているのかしら」

「他に誰がいるかしら」

辺りを見回しながら言う。

「あら、いないけれど、あなた達を倒すまでは逃げないわ」

「そう、ならいいけれど」

忠告は聞き入れられなかった。

そして、唸る音を出していた正体が到着する。

「危機一髪です！」

「二人とも無事か」

唸る音の正体はバイク乗っていたのは恵理奈さんと流深ちゃん。

「流深、助かったわ」

二人がバイクから降りる。

「はい、助けました！」

「無事そうだな」

「はい、大丈夫です」

真希が答える。

「一気に片付けます！」

言い放った直後流深ちゃんの腕の先、袖を捲られた手から青白い

光がでた。

「創真、急いで下がって！」

「え、何で」

「いいからっ」

状況を理解する猶予も与えられず、真希によって恵理奈さんの方へと吹き飛ばされる。

飛んだ創真とすれ違うように黒い塊が飛ぶ。

黒く巨大な塊は津波のようにロボットへと進んでゆく。その幅は研究所の敷地程あり、高さはロボットをゆうに越していた。

黒い波がロボットに衝突する。

圧倒的な質量と威力で押し流されるかと思っただけ、少し後退しただけで立っていた。

黒い波が通った後は黒く染められていた。波は敷地全体を通り抜け眼前に見える景色は、黒く染め上げられたものだった。

創真の前に辺りを染めたものがあつたので手にとってみる。

「これは・・・砂鉄？」

「ああ、そうだ」

答えた直後辺り一面を覆っている砂鉄の一部に恵理奈さんが触れた。

「うわっ、凄っ」

創真が驚いた理由は目の前にあつた大量の砂鉄が大きな一枚の鉄板へと変化していたからだ。

「そうか、流深ちゃんの能力は発電系ライトエナジーで恵理奈さんは物質結合系ステイックマターの能力者なんだ、しかも上位の」

「ああ、そうだ」

短く答え、再び鉄板に触れる。するとロボットの足下の鉄板が綺麗に切られたようになり、地面とロボットにくっつくように鉄板が二分された。

「流深、頼んだ」

「はい！」

返事をした直後、指先から光が広がる。

刹那、砂鉄の津波により、塗装は剥がれ、表面は荒い鑢の目になったロボットが浮き上がり、真希と創真のいた建物へと飛んで行く。飛ばされた先にも、もちろん鉄板があり、打ち付けられ、両腕を開かせられ大の字の様になり、地面から若干浮いた形で静止した。

「さて、これでようやく落ち着いて話せるな」

振り向き続けて話す恵理奈さん。

「二人とも本当に無事そうだな、安心した」

怪我をしていないかと二人を見回す。

「ええ、私はなんともないわよ」

笑顔で返す真希。

「俺もさつき真希に飛ばされて擦りむいた以外は大丈夫です」

答えてから飛ばした張本人に一瞥するが顔を逸らされる。

無事を確認し終えたので敵の方へと振り返る。

「たつぷり礼をさせてもらおうか。浮華冷菜^{ふかれいな}！」

ロボット越しの相手を睨みつける。

「あら、よくご存知で」

ロボットから浮華冷菜の声が返ってくる。

「恵理奈さんアイツと知り合いなんですか!？」

真希が訊く。

「いや、直接会うのは初めてだ。だが、あの兵器を見てそう思った」

「どんな奴なんですか?」

今度は創真が訊く。

「確か元々は能力者監視委員に所属していたんだ^{チェッカー}」

「能力者が暴動を起こしたりしないか見張る警察みたいな所ですね」

「ああ、そうだ。その技術部、暴動などが起きた際、鎮圧に使う武器の開発する部署に居たんだが、鎮圧する際に必要以上の威力の武器、端的に言えば殺人兵器を作るようになり追放されたと聞いている。あれとかを造り始めたんだろっな」

そのあれこと、ロボットを見つめる。

「確かにあんなのを作り始めたら追放されますね」

「あら、追放されたのではなくて私から辞めたのよ」
浮華がロボット越しに答える。

（あ、聞こえていたんだ）

心中でつぶやく創真。

「もし、大規模な暴動が起きたら。もし、高レベルの能力者が暴動を起こしたら。

それを踏まえて新たな武器を開発していたのに、それは只の殺人の兵器だと言われたのよ。それで頭にきて抜けたのよ」

「それはただの逆切れなんじゃ・・・それにその人が言っていたことは正しいと思うのは俺だけだろうか。現にさっき殺されかけた訳だし」

銃撃されたときの事を思い出す。

「確かに私も殺されかけたわ」

ここに二人の証人がいる。

それに対し浮華はこう反論した。

「あら、あなた達を殺すつもりは最初からないわよ、さっき撃ったのはゴム弾。威力こそ強めにはいるけれど、殺傷能力はないわ」
「殺傷能力がなかったら良いって訳じゃないでしょ！もし喰らっていたら私たちは大怪我していたかもしれないじゃない！」

真希が浮華の反論に噛み付く。

「あら、実際には喰らっていないから、気にする事はないんじゃないかな
いかしら」

悪びれた風もなく返した。

「喰らった、喰らわなかったとかじゃなくて、私が言いたいのは」

真希の言葉の途中恵理奈さんが腕を真希の前に出し静止させる。

「もういい、こいつはさっさと動けなくして警察に突き出す」

「あら、あなた達にそんなことができるかしら」

「ああ、そんなポンコツロボは破壊する」

言い放ち目の前にある鉄板にもう一度触れる。
すると、鉄板の一部が銃弾の様な形に変化した。

「流深！」

「はいです！」

返事と同時に流深ちゃんの指先から青白い火花が散り、刹那、銃弾の形をした鉄塊を浮かせる。

浮かんでいる鉄塊は先程撃たれたゴム弾とは比にならない程の数があつた。

「えいつ！」

流深ちゃんの短い掛け声を機に、浮いた鉄塊がロボットに近い方から順々に飛んで行く。そしてそれらが全てロボットへと直撃する。金属同士がぶつかり合う音が響き終え、静寂になる。ぶつかり碎けた鉄塊は中を漂ったり、地面に着地していた。

攻撃を受けたロボットは撃たれる前と同じ姿でそこにあつた。

多少ボディーに傷が増えてはいたがそれだけだった。

「流石に硬いな」

恵理奈さんがつぶやく。

「あら、これで攻撃はおわりかしら」

浮華が挑発の声を上げる。

「いや、まだある。流深、アイツを覆ってくれ」

「はいです！」

恵理奈さんの指示通りに、流深ちゃんがまだ中に浮いていた大量の砂鉄を操り、ロボットを覆い包む。

そして、近場の鉄板に触れ、ロボットを覆っていた砂鉄を固め、鉄板へと変化させ、動けなくする。

「では、終わらせるか」

言うてからロボットの下へと一歩ずつ近づいて行く恵理奈さん。

その後に続こうとする三人。だが、

「真希と流深はそこに残れ」

恵理奈さんが告げる。

「何ですか！」「ボクも行くです！」

真希と流深ちゃんが不平を言う。

「真希は流深の護衛。流深は非常時の時そこにいる方が都合がいいからだ」

「わかりました」「わかったですう」

二人とも渋々納得する。

「じゃあ、創真はそっちなんですか？」

やはり納得がいかないのか質問をする。

「それはそっちに置いて置いても意味がなさそうだからこっちにしたら。それだけだ」

(なんか俺、どうでもいい理由でこっちなんだ)

「あゝあ、なるほど。納得しました。」

「それで納得すんのかよ！」

思わず声を上げていた。

「だってこれ以上に納得できる理由がある？」

「ないですね。そうですね」

(ここで突っかかっても無駄なだけだな)

という事で、二手に別れてから歩き、ロボットの前に到着。

近くに来てちゃんと見るとやはりでかい。

「まずは腕から分解するか」

俺に教えてくれたのか、ただの独り言かはわからないが、つぶやいてから、軽く地面の鉄板を蹴り、自身が乗っている部分を持ち上げ、台のようにし腕の正面に着く。

どうやって分解するのか興味心身で見つめる。

最初に鉄板に触れ、それをもぎ取り捨て、そこにロボットのボディが現れ、手を触れ目をつぶる。

(どんな金属を使っているのか探しているのか、確か物質結合の能力で物を変化させるには、それが何なのか理解していないと能力が使えないみたいだからな)

「わかった」

つぶやいた直後にロボットの右腕が落ちた。

次に同じ要領で左腕を落とし、キヤタピラと胴の接合部分も切り落とした。

（決着ていうのは案外呆気なくつくもんだな）

最後に胴を真つ二つに割る。

「あら、わたしの負けかしら」

操縦席に座っていた浮華が両手を挙げて中から出てきた。

「なんて言うと思ったかしら」

言葉と同時に両腕を下げ、袖口に仕込んでいた拳銃を二丁取り出し、恵理奈さんへと向け連射する。咄嗟にそれを避けるために右側へと飛び込む様に回転し、鉄板の敷かれた地面の上を転がる。

「流石にやるわね」

咄嗟の攻撃を避けるだけではなく、もう攻撃の効かない状態になっていた。

浮華と恵理奈さんの間には二人を隔てる様に一枚の壁が出来上がっていた。

その壁は鉄製、回避した際の転がった一瞬で地に手をふれて壁を形成した。

注意が自分に来ていない事に気付いた創真が浮華の背中目掛けて走り出す。

足音を殺した走り方で背中へ近寄り、勢いと腕力を込めた拳を浮華に放つ。

感づかれる事なく放った拳が浮華の背中へ着々と進み、命中し吹き飛ばす。

だが、吹き飛ばされたであろう場所には誰も居らず、細長い何かがあった。

細長く立った四本のなにか。辿るように下方から上方へと視線を滑らせる。

最初に見つけたのは人の脚。次は腕と胴。次は頭。その顔をよく見つめる。

それは見覚えのある、最近であった人物。今対峙している敵。浮華だった。

細く延びた四本の棒は支える脚。その脚は浮華の首の後ろ辺りから延びる。

黒い脚が浮華を少し浮かせた状態にし、支える。背中に何かの機械が有る。

「あら、後ろからの攻撃なんて卑怯じゃないかしら。おかげ様で起動しちゃったじゃない」

言う事を聞かない子供に諭すかのように創真に告げる。

「そんなよくわからない物を使うよりは、卑怯じゃないと思うけどな」

よくわからない、という言葉に反応したのか述べた。

「あら、これはただの安全装置よ。セーフティーデバイスまだ開発中だけれど、なかなかいいのよ。自身の危険に気付いた時に身を護ってくれるのよ。今回は気付くことができなかったけれど、本体を攻撃してくれて助かったわ。もうあなたの攻撃は当たらないわよ」

「へえ、面白そうだな」

安い挑発に乗り、浮華へ向け走り出す。

そして、四本足に支えられている浮華の直前に迫る。

(脚の中に入り込むのは危険そうだな)

試しにと支えている脚の一本に蹴りをかましてみるが、やはり人の蹴り程度ではビクともしなかった。

「あら、その程度かしら。次は私の番ね」

そう言った直後に背中に背負っている本体から二本の棒を新たに出し、腕として使う。

そしてその腕で左前足に当たる脚を蹴った創真に向け突きを放つ。放たれた突きに体を半身捻ってかわし、腕が地に着く直前に掴み投げる。

敵の運動エネルギーを利用し投げ飛ばそうとしたが、後ろ足に当たる棒が浮く程度が限界だった。

タイミングを完璧に合わせたウルトラCの技であったが、バランスを崩すのが精一杯だった。

反対の腕で突っ張り体制を立て直した浮華が今度は突きではなく、薙ぎ払うように攻撃をしようとしたが、体制を崩した間に創真のこを見失っていた。

「うっ」

いきなり低く苦しそうな声上がり、浮華が崩れ落ちる。

倒れた理由は僅かな隙に死角となる真下に走りこみ、腹に一撃を決めていた。

そして、一瞥しその場を離れる。

「惠理奈さん」

「ああ」

短いやり取りだったが、それだけで伝わった。

返事をした直後地面に手を付き、浮華の機械でできた手足を鉄で動けなくし、歩き一歩ずつ近づいて行き、動けなくなった浮華の背後に立つ。

「今度こそチェックメイトだな」

「そうみたいね」

苦しそうな声を上げる。

その声を聞いてから浮華の背負っている機械に触れ、先程のロボットと同様に砕いた。

「片付いたな」

浮華の事を見下ろし、携帯を取り出し何処かへ電話をかける。

「私だ、終わったから来い」

一言だけを告げて携帯をしまう。

そして、数十秒後に5台の車が来る。

一人の男が先じて車から出て声を上げる。

「御友！ ホシはどこだ！」

「一人はここにいる、他の奴はそいつが知っている」

ホシって犯人のことなんだあっと思っていたら、話が回ってきた。

「で、どこにいるんだ？」

男が創真の近くに駆け寄ってきて訊く。

「あの建物の中に十人ちよつといます」

「そうか、人数が多いな、応援を呼んでくれ」

つぶやいてから、乗っていた車の助手席に乗っていた男が「はい！」と返事をする。

「今から突っ込むぞ！ ついて来い！」

男が他の車に乗っている人達に告げる。

そして、車に乗っていた全員が建物の中へと突入する。

「恵理奈さんあの人は誰なんですか」

「ああ、アイツは竹口、刑事だ」

「へえ、そうなんですか。どついう知り合いなんですか？」

「単なる大学時代の友人だ」

と、そこに真希と流深ちゃんが合流する。

「二人とも怪我してない？」

真希の駆け寄つての第一声。

「大丈夫だ」「俺も大丈夫！」

恵理奈さんと創真が答える。

「安心したです！」

真希の気持ちを代弁した流深ちゃんが笑顔で返す。

そこに竹口が建物の中から出てきて訊く。

「中の奴らをやつたの誰だ」

真剣な眼差しが向けられる。

「あつ、それ俺です」

拳手する。

「よくやつたな、お前すげえよ」

微笑を含んだような声でかえす。

「竹口丁度いいところに来た。この二人を送っていつてくれ」

恵理奈さんが創真と真希を指す。

「はあ、なんでだよ。警察はタクシーじゃねえぞ。御友が送って行

「けよ」

あからさまに拒絶をする。

「構わんが私はバイクで来ている。ということは警察が4人乗りを推奨するという事でいいんだな」

（これは軽い脅迫だな）

「いや、そんなことは言っていないが、っ、あー、もっ、送ってきやいいんだろ」

頭を掻きながら嫌々承諾する。

（流石恵理奈さんだな）

心中で苦笑いの創真。

（とりあえず帰る足ができたからいいか。いいよな、うん）
無理矢理押し入るようでも申し訳なく思う。

「それじゃあ竹口さん、よろしくお願いします」

創真がそんな事を思っていたのに遠慮なしの真希。

「お願いします」

それに続く創真。

「あいよ、ほら、サッサと乗りな」

乗ってきた車に戻る竹口。

「「はい」」

小学生のように返事する二人。

そして乗り込む。いつの間にかに恵理奈さんと流深ちゃんもバイクに跨っていた。

「御友、先導してくれ」

「ああ」

ということを出発して研究所へと向かう。

空の色はもう黒だけではなく、赤から青へのグラデーションがかり始めていた。

エピソード

エピソード

空もすっかり青に支配され黒色が淵を取る程度になっていた。

バイクと自動車の一つの建物の前に止まった直後自動車の中から飛び出し、建物に入る。それに続いてもう一人が降りる。バイクの二人はガレージへと向かう。自動車の運転手は一仕事終えたとはかりに煙草に火を付けふかす。バイクを置き終えた二人が入り口へと戻る。

「じゃあ俺はもう戻るぜ、じゃあな」

煙草を掴んだままの右手を軽く上げる。

「ああ、助かった」

軽く礼を言い、それを受け取った車が動き出し、角を曲がり姿が見えなくなる。

「真央！」

部屋に入るや否や真希が大きな声を上げる。

「！ お姉え！？ お姉え！ 無事だったのね、よかった、本当によかった」

声を上げるとほぼ同時に真希の胸に飛び込み、喜びや驚き、安堵などが混じった声を出していた。

「よかった、本当によかった、ずっと心配していたんだから、ずっと待っていたんだからね」

涙目になり潤んだ瞳で真希を見つめる。

「私はなんともないから、ほら、泣き止みなさい」

真央ちゃんと同じ目線になり、笑顔に向け、頭を撫でる。

「うん、わかった」

そういつてから袖口で目を擦り涙を拭い、笑顔を見せる。

それを一足をくれて入って来た創真が見ていた。

(普段は本当にしつかりしているけれど、やっぱり小学生だな)

創真がそこにいることに気付いた真央ちゃんが創真のほうへと向き直る。

「お姉えを助けてくれてありがとうございます」

そして、深く頭をさげる。

「どういたしまして。ほら、もう頭上げて」

(こんな時だつてのに本当にしつかりしてるな)

「助けたのは俺一人じゃないしさ、それに俺がこうしたかっただけだからそんなに感謝しなくていいよ」

(一方的に感謝されるとなんかてれるしな)

「いや、でも・・・」

真央ちゃんが納得しきれない表情でいる。

「ほら、そんなに気にしなくて良いつて創真が言ってるんだからそれでいいでしょ」

「うん、そうだね」

渋々納得してくれた。

「真希もたまにはいいフオローするんだな」

「ん？ アンタ、今なんか言った」

(やべえ、思わず声に出してた)

「いえ、気のせいだと思います」

「いや、なんか言った」

こつちに真希の視線がピンピン来ているが怖くて視線を合わせられない。そして、気配が着実に近づいて来る。

「もう、お姉えったら帰ってきたと思つたらすぐにお兄いといちゃつちちゃつて」

安堵の涙を拭いながら。

(おっ、いつもの真央ちゃんに戻ってきた)

「だから誰がいちゃついで、あーもう」

「がっ」

イラついた真希が俺の事を殴りました。なんで避けなかったと訊かれたら恐怖で動けなかったからです。

そして腹を抱えてしゃがみこむ創真。と、そこに。

「真央ちゃん!」

「流深ちゃん」

二人が駆け寄って抱き合う。

どこかで見たような風景がながれる。

「ただいまです!」

「おかえりなさ。怪我してない?」

「はい! 大丈夫です!」

「ならよかった」

安堵のため息を漏らす。

「みんなそろったのでパーティーの続きをやるです!」

「え、うん、そうだね」

一瞬戸惑うが肯定。

「ああ、そうしろ」

流深ちゃんに遅れてきた恵理奈さんも肯定。ということとは。

「じゃあ、続きをやりましょう」

「おっ、そうだな」

恵理奈さんの許しが出たので皆で地下へと戻る。

そして今、中断されていたパーティーが再開される。

誘拐なんていう惨事があったことを忘れるほどに楽しいパーティーが。

エピソード（後書き）

どうもこんにちは337（みみな）と申します。

『あ、どうも、拾われました。』をここまで読んでくださりありがとうございます。

これでようやく第一部完結になります。

短くない時間をかけてこれを読んでくれた事にもう一度感謝したいと思います。ありがとうございます。

本作品は読んで頂いてわかる通り、近未来 + 超能力のバトルものです。

そして私の最初の作品です。

初めて書いたので拙い文章ですが、多めに見てやってください。

この続きの第二部エピソードは近々上げるつもりです。

最後にもう一つ書いている『なんでこんなにまじ兄弟きょうだいが!?!』というのも読んでもらえると嬉しいです。

それでは337でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5983w/>

あ、どうも、拾われました。

2011年10月29日00時43分発行